学校法人 中越学園
長岡大学

文部科学省
地(知)の拠点

平成26年度　学生による地域活性化プログラム
權五景ゼミナール活動報告書

十分杯で長岡を盛り上げよう

―知名度の低い歴史的題材は観光資源になれるか―

平成26年度
04

ご　あ　い　さ　つ

学長　内藤　敏樹

継続は力なりと申しますが、今回で８年目を迎えた地域活性化プログラムにこの言葉があてはまるでしょうか。指導教員が入れ替わったりテーマが変わったりで、最初から同じテーマで続いている取組はそれほど多くはないのですが、学園祭などで８年間の成果を一覧できるようになっていたりするのを見るとちょっとした壮観です。昨年度から文科省の「地（知）の拠点整備事業（COC）」の一環としての位置づけがなされ再スタートしましたが、当初の意気込みが指導教員によみがえったのではないかと期待しています。

地域活性化プログラムは、学生が地域の中に入っていって地域の課題を解決していこうとするものですが、その実は地域による学生活性化プログラムでもあります。つまり我々教員が講義やゼミ各種の演習を通じて学生を教導するだけでなく、さまざまな形で地域の方々と接し、時に怒られ時には褒められるという体験を積むことによって学生が実社会に出た時の「コミュニケーション能力」を飛躍的に伸ばせる可能性が期待されているのです。

またプログラムはチームで共同作業を行うものなのですが、率直にいってメンバー間にはいろいろと温度差があります。時間を守らない、割り当てられたタスクをちゃんとやってこない等さまざまなドタバタが起きていること、これも実社会の縮図であるかと思えます。こうした困難を乗り越えることを通じて成長していく学生が増えています。

これまでのプログラムの中で学生と地域の方々がいろいろな形で接触し、さまざまな活動を行ってまいりました。中には「若い学生さんが地域の中に入ってきてくれるだけで充分です」というご意見もありましたが、さらにプラスしてもっと地域のためになることをしなければならないと考えています。

本学は開学以来、「去華就實」「社会に役立つ人間となれ」をモットーとしています。ただ役に立つかどうかを決めるのは社会であり他人です。ここで独りよがりがあったり、根拠のない独善があったりしたのでは真に「役立つ」人間にはなれません。つまり上のモットーは、自らに対する客観的な認識に裏付けられた自身が必要になってくるということです。いろいろな人たち－関係者から率直な評価をもらえることは、成長途上の学生にとって得難い機会であるかと思います。あとはその評価をどう活用していくかということですが、この点はまだ学生次第ということになりますので、このあたりも我々は考えていかねばならない点であるかと思っています。

地域交流、実社会との連携を行っている教育機関は他に数多くあると思います。東日本大震災の後も、被災地の支援を正課の中で取り上げた大学があると報告されています。ただ、本学のような形で長期間地域との関係を築き上げているものはあまりないのではないかと自負しています。地域の方々、特に学生と接することになる各位にはご迷惑なことかも知れませんが、次世代の若者の成長のためによろしくお願いする次第であります。

平成２７年３月

Japan Institution for Higher Education Evaluation
JIHEE
since 2004
2009.4－2016.3

長岡大学は、文部科学大臣が認証する財団法人日本高等教育評価機構による大学機関別認証評価を受け、平成22年３月24日付で、「日本高等教育評価機構が定める大学評価基準を満たしている」と「認定」されました。
認定期間は、2009年４月１日～2016年３月31日です。

はじめに

― 十分杯で長岡を盛り上げよう ―

長岡大学准教授／ゼミ担当教員　權　五景

權ゼミでは、2011 年度から十分杯の広報活動を行ってきました。そのきっかけですが、權ゼミはもともと企業見学を通して現実経済や経営に対する理解を深めることを目標としておりました。たまたま、長岡の工業の成り立ちを学ぶため、長岡歯車資料館を見学しその帰りに十分杯に遭遇しました。学生たちも小生も皆そのからくりとメッセージに惹かれました。その後、今はゼミのアドバイザーになってくださっている太刀川喜三様の十分杯展示会に偶然足を運ぶことになりました。その後、十分杯の講演会があることがわかりました。その時の講師が、現在、太刀川様とともに本ゼミのアドバイザーになってくださり、何と以前の見学先だった長岡歯車資料館の館長の内山弘様でした。きっとご縁があったと思います。その講演会に参加して以来、学生たちも小生もぜひ十分杯にかかわる活動を始めようと心に決めました。

１年目は、地元の若者が地元の歴史を学び、それを知らせていこうとする活動ということで、テレビや新聞の取材を受けました。初めての体験で、学生たちも小生もわくわくした記憶がございます。そして、活動の目標は十分杯の認知度を高めることに設定しました。また、活動開始にあたって、からくりの仕組みをわかりやすく伝えるためにオリジナルの紙コップ十分杯を製作して広報活動で配布しました。月１回ほどアオーレ長岡で暑い日も寒い日も活動を行いました。これにより、チームワークが良くなり、多少ではありますが人さまとのさりげない会話ができるようになりました。

２年目は、認知度の低さがそもそも問題でしたが、どれだけ低いかを確認しようではないかということで、長岡駅周辺でアンケート調査を行いました。授業でとったアンケート調査法をフルに活用し卒業論文に仕上げました。また、秋にアオーレ長岡で開催された酒の陣という大きなイベントに十分杯専用の立派なブースを長岡市が用意してくださり、私たちも力が入りました。

３年目は、主に、十分杯が長岡に初めて入った当時の経済・社会状況はどのようなものだったかについて、文献研究を行いました。元禄時代の経済・社会の状況を知るようになったり、十分杯と深いかかわりのある３代藩主についてのいくつかのエピソードを見つけたりすることができました。また、50 点ほどで数は少ないですが、それでもおそらく世界一多い十分杯のコレクションを学食の脇のショーケースに展示しました。

４年目の今年度は、着実に行ってきたお蔭で、それなりの収穫がございました。第１に、昨年に引き続き綿密な文献研究を行いましたが、多くのことがわかりました。それを年表という形にすることができました。第２に、地域の関係者と意見交換をはかる目的で「十分杯会議」を初めて開催しました。非常に意義深い会であり、来年度以降も開催に向けて努めてまいります。第３に、同会議で提案した、観光列車「越乃シュクラ」と十分杯のコラボレーションのアイディアが、今年の３月から越乃シュクラ内で十分杯での試飲や広報活動ができるようになりました。また、‘満つれば欠く’という教訓についても深く勉強することができました。

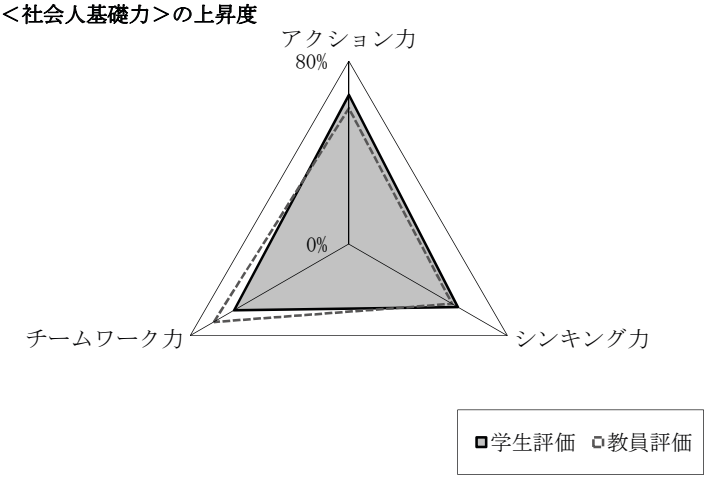
最後に、アドバイザーの二方、權ゼミの卒業生の皆さん、十分杯会議に来てくださった皆様、長岡コンベンション協会の皆様、初年度助成金を出してくださり、毎年酒の陣で立派なブースを用意してくださる長岡市の皆様、そして、私どもの活動をバックアップしてくださる本学の事務方の皆様にこの紙面を借りて深く感謝申し上げます。

平成 27 年 3 月

平成 26 年度　学生による地域活性化プログラム
社会人基礎力の上昇度

地域活性化プログラムにおける学生教育の目標は、社会人基礎力の向上、ビジネス展開能力の向上、専門的スキルの向上が目的である。平成 26 年度学生による地域活性化プログラムに参加した 10 取組の学生の「社会人基礎力」の伸び具合について、学生とゼミ担当教員にアンケートを実施した。アンケートは取組に参加した学生一人一人を対象に、社会人基礎力の変化を評価する形で実施した。学生は自己評価（有効回収 69）であり、教員は各ゼミ生についての評価である。

＜社会人基礎力＞の上昇度



★「社会人基礎力」

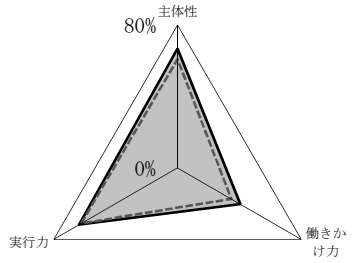
＝「アクション力」「シンキング力」「チームワーク力」が上昇

３つの社会人基礎力の上昇度（取組前と取組後の比較）は、学生の自己評価と教員評価の間にずれがある。
今後の取組においては、今年度の結果に現れている学生評価と教員評価の差を小さくすると同時に全体的な上昇度を高めていくことに対して、継続的に検討していく必要がある。

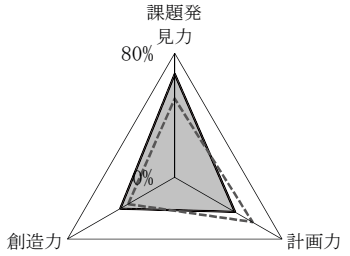
※図の網かけ ▒ は学生評価、点線 ┌─┐ は教員評価である。

	学生評価	教員評価
アクション力	65.2%	59.4%
シンキング力	55.1%	52.2%
チームワーク力	58.0%	68.1%

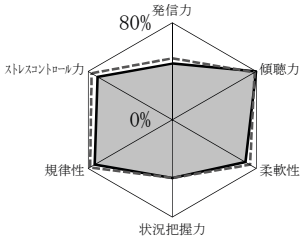
＜アクション力＞の評価



＜シンキング力＞の評価



＜チームワーク力＞の評価



	学生評価	教員評価
主体性	66.7%	60.9%
働きかけ力	40.6%	34.8%
実行力	63.8%	62.3%

	学生評価	教員評価
課題発見力	66.7%	50.7%
計画力	44.9%	58.0%
創造力	40.6%	34.8%

	学生評価	教員評価
発信力	46.4%	50.7%
傾聴力	79.7%	78.3%
柔軟性	69.6%	73.9%
状況把握力	47.8%	47.8%
規律性	73.9%	78.3%
ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力	71.0%	76.8%

＜アクション力＞

アクション力の３つの指標を比較すると、今年度の学生の場合、主体的には取り組めたと思っている学生の割合は高いが、教員の評価は低くなっている。学生はそれなりに積極的に活動していると感じている一方で、教員はもう一歩踏み出してほしいという期待感を持っているようである。

＜シンキング力＞

学生の自己評価では、課題は見つけられたが、自分で計画して課題に立ち向かい、課題解決ができた学生は残念ながら少なく、また創造力が低くなっている。同様に、教員評価でも創造力については厳しいものになっている。シンキング力が弱い傾向があり、この点をどのようにして伸ばしていくかが課題として残った形である。

＜チームワーク力＞

チームワーク力は、「アクション力」や「シンキング力」よりも学生評価と教員評価の類似性が高い。

学生の自己評価も同様であるが、教員の評価が発信力と情況把握力が低い点は、今後指導を強めていく必要がある。

学校法人 中越学園
長岡大学

「地（知）の拠点整備事業」（大学 COC）
長岡地域〈創造人材〉育成プログラム

文部科学省
地(知)の拠点

平成26年度 学生による地域活性化プログラム

十分杯で長岡を盛り上げよう

－知名度の低い歴史的題材は観光資源になれるか－

■担当教員
權五景

■ゼミ学生
２年生：中沢　裕太、小川　雄気、中澤　司

■アドバイザー：太刀川喜三 氏
内山弘 氏（長岡歯車資料館 館長）

取り組みの目的

- ✧ 十分杯の認知度を高める。
- ✧ 「満つれば欠く」、「足るを知る」の文化を広める。
- ✧ 観光商品の開発

取り組みの意義

- ✧ 地域文化遺産の発掘
- ✧ 地元の歴史を活用した地域活性化
- ✧ 地域の企業や組織との協力による活動

取り組みの成果

- ✧ 地域の関係者と意見交換をはかる「十分杯会議」の開催
- ✧ 長岡藩と十分杯との関わりについての年表作成
- ✧ 観光列車「越乃シュクラ」で十分杯の広報活動がスタート
- ✧ 「十分杯ブログ」の開設
- ✧ アオーレ長岡での広報活動
- ✧ 「酒の陣」に参加
- ✧ 教訓について、詳細な文献研究

長岡と十分杯の関わり

長岡藩を根底から支えていた精神は二つあったと言われている。一つが常在戦場（常に戦場にいる心構えを持って生き、ことに処す）の精神であり、もう一つが十分杯（戒め、節倹）の精神であるが、現在では十分杯の精神はあまり知られていない。

長岡藩と十分杯の出会いは三代藩主牧野忠辰公（まきのただとき 1665-1722）の時代にまで遡る。

長岡藩は開府してから新田開発や検地により財政が拡大一路にあった。さらに、元禄時代（1688-1704 年）になると貨幣経済が発展し、戦国期の苦しい時代から民衆も生活水準が向上し、生活必需品以外を購入する余裕もでき、町人の生活が奢侈化するにつれて武士たちも同調し華美な生活をするようになった。長岡も例外ではなかったかもしれない。
ちょうどその頃、高田藩で跡継ぎ問題が起きた。それを押さえるための出兵とその後の管理、そして度重なる水害により長岡藩は財政が逼迫するようになった。そこに、ある領民が持参した、「満つれば欠く」という教訓を持つ十分杯に強く感銘を受けた忠辰公は詩を詠み、藩の財政の引き締めをはかった。

また、近現代に入ってから長岡では、節目の年に記念品として配るという独特の文化が明治期から始まった。

学生が作成した紙コップ十分杯

（十分杯会議の様子）

（アオーレでの広報活動の様子）

平成２６年度　学生による地域活性化プログラム

十分杯で
長岡を盛り上げよう

―知名度の低い歴史的題材は観光資源になれるか―

權五景ゼミナール

２年生

13M005 小川雄気

13E019 中沢裕太

13M022 中澤　司

目次

１．序章
１．１　本稿の視点 …… 1
１．２　２つの基準 …… 2
１．３　活動の構成 …… 3

２．十分杯入門
２．１　４つの特徴 …… 4
２．２　教訓 …… 5
２．２．１　『十分盃銘』の中の「天道虧盈」
２．２．２　様々な「足るを知る」と「満つれば欠く」と歴史
２．３　杯の構造 …… 10
２．４　原理 …… 10
２．４．１　大気圧説
２．４．２　水分子の鎖説
２．４．３　圧力差説
２．５　ルート …… 14
２．５．１　ピタゴラス杯
２．５．２　中国の欹器
２．５．３　朝鮮半島の戒盈杯
２．５．４　石垣島の教訓茶碗
２．５．５　山形県の八分杯
２．６　十分杯の名称 …… 19
２．７　杯と盃 …… 19

３．長岡と十分杯の関わり
３．１　江戸時代 …… 20
３．２　明治時代以降 …… 22
３．３　長岡との歴史的関わりを調べた感想 …… 24

４．今年度の活動紹介と成果
４．１　昨年度までの活動 …… 25
４．２　今年度の活動 …… 27
４．２．１　アオーレでの広報活動
４．２．２　長岡酒の陣での広報活動
４．２．３　十分杯会議の立ち上げ
４．２．４　悠久祭での展示活動
４．２．５　ブログの立ち上げ
４．２．６　成果

５．文化財による地域活性化の事例研究
５．１　事例研究の必要性 …… 34
５．２　事例紹介（歴史編）…… 35
５．２．１　一乗谷遺跡の特色
５．２．２　長岡と一乗谷の違い
５．３　事例紹介（精神編）…… 35
５．３．１　日新館の特色
５．３．２　長岡と日新館の違い
５．４　問題点・課題と新たな提案 …… 36
５．４．１　問題点・課題の整理
５．４．２　新たな提案

６．結びに代えて

１．　序章−本活動の視点と活動の位置付け−

１．１　本活動の視点

日本経済はバブル経済が崩壊してからなかなか立ち直れない。安倍政権になってからかつてない大胆なマクロ政策が展開されているが、多くの国民が実感できるほどの成果には繋がっていないのが現状である。このような状況をどのように理解したらいいかについて、「お金が十分にあれば、また、お金の利用価格を安くすれば、社会の中でお金は以前より循環するようになるんだ。」ではなく、「欲しい物がないから個人はお金を使わないし、社会全体としてはお金が循環しなくなっているのではないか」と仮説を立てた。つまり、私たちは、「欲しい物」を作ることが経済活動として非常に重要だと認識しているのである。

そこで、欧米先進国にあって日本にないものは何かを考えてみた。世界的な大学、世界的な IT 企業、世界的な遊園地等々。確かにそのようなものは欧米発のものだが、日本に全くないわけではない。日本にあるものも欧米先進国と肩を並べられる、またはそれ以上の物もたくさんある。ただ、それらの産業は世界的規模で競争が展開されているのが現状である。では、ブランド物はどうだろうか。殆どが欧米諸国のものであり、今は大企業となっているが成長過程は決して大企業ではなかった。スイスの時計産業、イタリアやフランスの皮革製品産業がそうである。日本に欠けているのはこのような産業ではないだろうかと暫定的に考えるようになった。時計にしてもカバンにしてもブランド品はとんでもない高値で取引されている。それでもブランド品は客からのロイヤリティが高い。消費者の中にはそんなに高いものに金を使うのは「良くない」と見ている人たちが多い。ご飯一粒を大事にしている人がたくさんいるわけだし、節約は間違いではない。しかし、ヨーロッパでそのような「贅沢すぎて良くない」産業が雇用を増やし、資金への需要を高め、イノベーションを起こしているのが現状である。つまり、産業を倫理観に基づいて「良い」、または「良くない」で見てはならないのである。どれだけの人の仕事が作られるのか、どれだけのお金を必要とするのか、どのようなイノベーションが期待できるかなどの見方が大事ではないかと、結論付けた。

そこで、長岡に富をもたらすにはどうしたらいいかを考えてみた。私たちの結論は、ヨーロッパのように、「他の地域や国になく、それなりの需要があるもの」を探すことだった。この結論に至る前に、長野県のどこかの市がやっているように、自転車を開発したらどうか、日本一の米菓をもっと世界市場で売れるようにしたらどうか、日本酒やコシヒカリ関連食品を世界市場に売り出せるようにマーケティングやデザインに力を入れたらどうか等々のことを考えてみた。しかし、これらのアイディアには大きな課題がある。第１に、大学２年の私たちはほぼ確実に実現可能にする力を持ち合わせていない点である。第２に、すでに存在しているものではないため、新たな投資を必要とするのはもちろんであり、それを可能にするためのノウハウはあまり蓄積されていないだろうと考えた。言い換えれば、そのようなノウハウがなかったからこれまでに実現できなかったのである。このような見方が正しいのであれば、前述したアイディアの実現は不可能に近い。そうする

と、アイディアは無意味なことになってしまう。つまり、実現に向けてのアイディアは「現実にあるもの」から始める必要があると結論付けた。

１．２　２つの基準

そこで、私たちは「すでに長岡に存在する物や事」のなかで、「私たちが関わることのできる物や事」を考えることにした。つまり、長岡ならではの「もの作り」から「もの探し」へ方向転換をしたのである。まず、最初に思い浮かんだのは長岡花火だった。確かに復興という歴史的な意味合いもあり、規模も大きく、最後に打ち上げるフェニックスは多くの人を魅了する。ところが、私たちが関わることの意味は小さいと判断した。私たちにできることは、募金ボランティア、掃除ボランティア、案内ボランティアぐらいであろう。どれもその日限りのもので、すでに多くのボランティアが活動をしている。また、私たちにアイディアを積極的に出せるかが何より疑問だった。なぜなら、約７０回の歴史のある行事、つまり、７０回の試行錯誤を経験している歴史的イベントに対して、ただ観客として見るだけだった私たちにできることは少なすぎるのではないかと考えたからである。

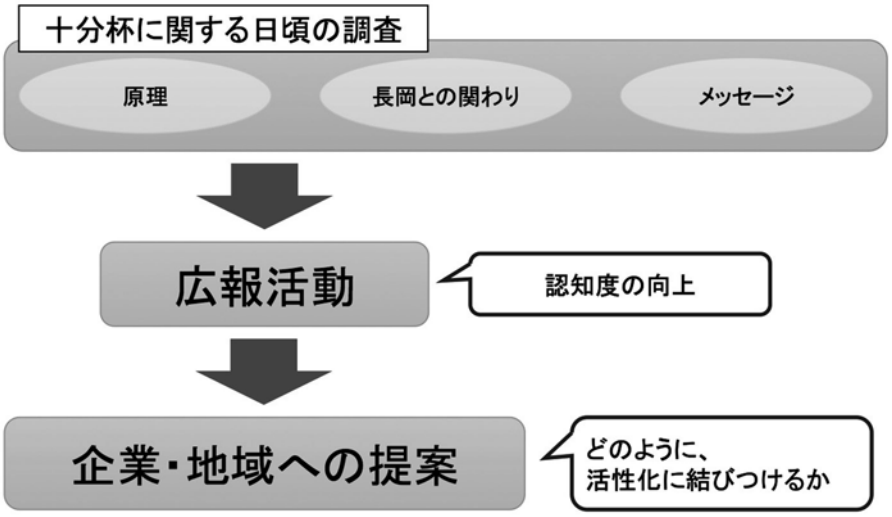
そこで、自然に私たちは權ゼミナールの先輩たちが３年間行ってきた十分杯の広報活動を新たに考えるようになった。なぜなら、十分杯は日本中に長岡だけにあるわけではないが、後述するように歴史と文化の観点からすれば最も盛んな地域が長岡だからである。また、長岡は全国的に有名な日本酒の酒蔵が複数ある日本酒の街というイメージもある。十分杯は杯であるから、アイディア次第では長岡の誇れる日本酒と一緒に広報できるかもしれないと思うようになった。十分杯は「満つれば欠く」、「倹約」というメッセージがあり、木製のものもあり、なお価格もそれほど高くないため、長岡土産として育てていくことも可能ではないかと可能性を高く見た。しかも、すでに３年間の広報活動の蓄積があるため、全くゼロからの出発でもない。それに、アドバイザーのお二方を含め人的ネットワークもあった。このように十分杯という題材は、長岡にある非常にユニークで長岡ならではのものであり、やり方次第では長岡の富を少しばかりかもしれないが大きくすることができると私たちは判断した。欧米において、時計産業や皮革製品産業が一国または一地域の生活の安定を実現するまでに成長したが、十分杯はそのような日用品ではないためそれほどの成長は見込めない。しかし、かつての時計産業や皮革製品産業と同じく、ビジネスとしての可能性を持っている産業という点は共通しているのではなかろうか。

１．３　活動の構成

このような理由と判断から、私たちはとりあえず１年間十分杯の広報活動を行うことにした。なぜなら、本来地域活性化プログラムは３・４年主導で行われているからである。私たち３人は全員２年で、しかも単位と関係なくこの活動を行ってきた。とりあえず、１年間活動をやってみてから３年以降もそれをやり続けるかを各自判断することとした。

上述した問題意識から１年間の活動を以下の図のように行うことにした。

＜図１＞この１年間の活動のイメージ図



最初の難関は、アオーレ長岡での広報活動のため、説明力を高めなければならないことだった。まず、説明の部分を①サイフォンの原理、②長岡との関わり、③十分杯に込められたメッセージの３つに分けた。ちょうど３人ということもありそうすることとした。これをベースに認知度向上のために広報活動を行い、最終的には活性化に結びつけるために地域の企業と社会に提案していくこととした。

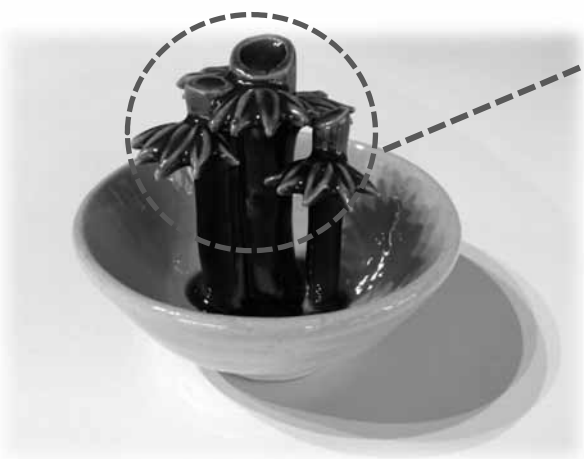
２．十分杯入門

２．１　４つの特徴

十分杯は陶器やグラスや木のマスなど様々な形のものが存在している。そして、多くの十分杯に共通していることは、①＜図２＞の写真のように真ん中に柱が立っている、②その柱（飾り）の中を管が通っている、③＜図３＞のように底に穴があいている、②（図２）の写真のように真ん中に柱が立っている、③その柱（飾り）の中を管が通っている、④一定の量（８分目程度）を超えて注ぐと、中に入っていたすべてのお酒が底の穴から漏れてしまうため、杯の中は空になるなどの４点が挙げられる。

十分杯はお酒を飲む際は中央にある飾りが鼻についてしまい、非常に飲みにくいため実用性はあまりない。しかし、十分杯という杯は目でも十分に楽しむことができる杯である。十分杯の飾りは数多くの種類があるため、季節や行事によって飾るものを変えることでインテリアとしての役割も果たすことができる。人によっては、お正月に飾る家庭もあるようである。

＜図２＞　江戸時代中期の平戸焼の十分杯（上図）と北越銀行の松竹梅（竹）（下図）



飾り（かざ）

この十分杯の仕組みにはサイフォンの原理というものが使われている。サイフォンの原理とは、サイフォン（チューブ、管）を使って、高いところの水を低いところへ移すしくみのことである。液体の量が少ないのであればこの原理を活用する出番は少ないが、量が多くなれば、管一本で解決できる非常に便利なものである。この原理はトイレの水道管、消火器、灯油ポンプなど私たちの身近にも使われている物がある。

＜図３＞十分杯の底の穴

（注）この穴と＜図２＞の飾りに隠れている管がつながっている。

２．２　教訓

２．２．１　『十分盃銘』の中の「天道虧盈（てんどうきえい）」

十分杯には「足るを知る」という教訓がある。現状を満ち足りたものと理解し、不満を持たない、程々で満足するという意味である。しかし、十分杯の教訓として一般的に知られている「足るを知る」という言葉は、十分杯を長岡に広めたといわれる長岡藩３代藩主の牧野忠辰が詠んだ『十分盃銘（図４）』という詩の中には出てこない。

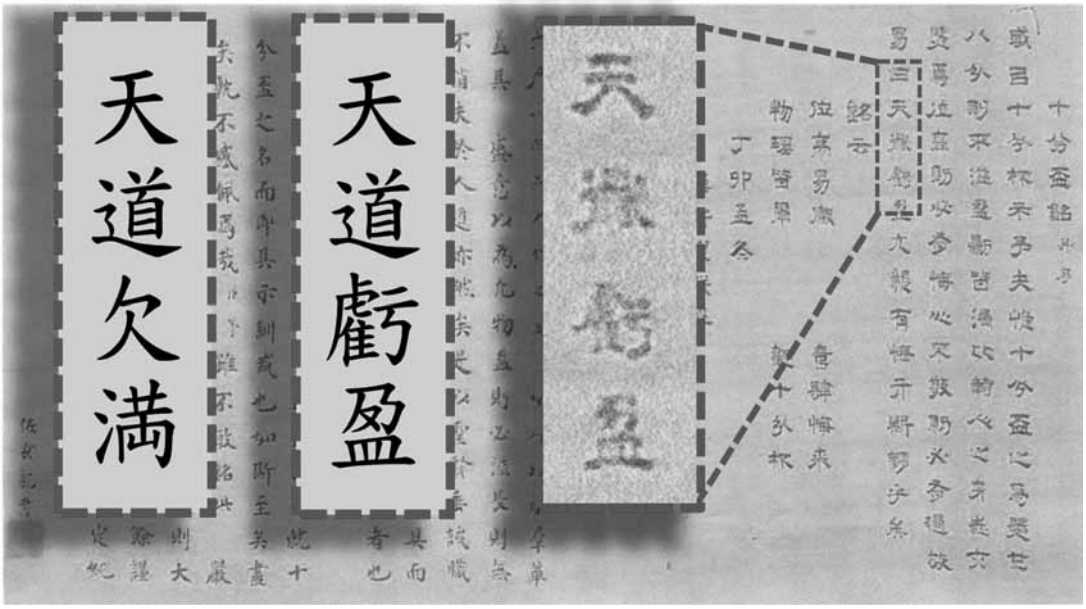
牧野忠辰は、十分杯に感銘を受けて『十分盃銘』という詩を詠んだ。その詩の中には‘足るを知る’という言葉ではなく‘満つれば欠く’という言葉が出てくる。‘満つれば欠く’とは、あまり欲張りすぎるとかえって失ってしまうので欲張るなという意味である。

江戸時代において、長岡藩はもともと、豊かな藩であり財政的にも余裕があったが、高田城の請収、幕府の委託事務、度重なる水害などが財政を圧迫し、財政的に厳しい状況になってしまった。その頃、長岡藩には十分杯が伝わったとされる。十分杯は領民が持参したとされ、その十分杯に感銘を受けた牧野忠辰は、『十分盃銘』を詠んだという。さらに牧野忠辰は、十分杯を藩士たちの生活を戒め、節約をさせるための手段として活用した。

では、具体的にどのような表現になっているのか確認してみよう。牧野忠辰の『十分盃銘』に出てくる「満つれば欠く」は正しくは「天道虧盈」の４文字である。この４文字は、もともとは易経に出てくる言葉である。易経には「天道は盈（みつる）を虧（か）きて謙

に益し」と出てくる。「天は満ちたもの（＝盈）を欠けさせ、欠けたもの（＝謙）を満ちるようにする」という意味である。このように、牧野忠辰は十分杯を見て、大きな感銘を受けたため詩を詠んだわけであるが、大きな感銘とはずばり、‘天道虧盈’だと解釈することができる。

＜図４＞『十分盃銘』の中の「天道虧盈」



前述したように、飾りの中には管が通っており、約８割以上の液体を注ぐと、サイフォンの原理により底の穴から液体がこぼれてしまう。この約８割以上の液体を注ぐとこぼれてしまう様子から、‘欲張りすぎるとこぼれてしまう’というという意味で、「足るを知る」という教訓がつけられた。初めは、この足るを知るについて調べていたが、十月の悠久祭で行った十分杯会議の際に、アドバイザーで長岡歯車資料館の内山弘館長から、十分杯の教訓は「足るを知る」だが、長岡に十分杯を広めた長岡藩３代藩主牧野忠辰の『十分盃銘』には「足るを知る」は出てこず、「満つれば欠く」という言葉が出てくるというご指摘をいただいたため、「満つれば欠く」についても調べることとした。

２．２．２　様々な「足るを知る」と「満つれば欠く」と歴史

十分杯の広報活動を行うにあたり、十分杯の教訓についてより充実した説明をするために、‘足るを知る’と‘満つれば欠く’について調べてみると、様々なところに出てくることがわかった。

‘足るを知る’という言葉が最も古く記述されたのは、おそらく中国の『老子』で、作者の老子が生まれたのは紀元前６世紀頃だと思われる。そして、その後、紀元前５世紀になってから、インドで仏教が成立した。日本の‘足るを知る’は徳川光圀（みつくに）が寄進したとされる「知足の蹲踞（つくばい）」が龍安寺にあり、日本には知足院という寺があることから、おそらく仏教から来ていると思われる。

日本では、江戸時代に徳川光圀が龍安寺に「知足の蹲踞」を寄進したとされ、さらに‘満つればかく’と似たような意味を持つ「九分は足らず、十分はこぼれると知るべし」という言葉を残した。おそらく、徳川光圀も十分杯、あるいはそれと似たようなものを知っていたに違いないだろう。ただ、現代と違うのは、‘八分’ではなく‘九分’を使うということである。江戸時代前期には‘八分’ではなく、‘九分’という言葉が一般的だったのかもしれない。とにかく、長岡つまりは牧野忠辰に十分杯が伝わったのも江戸時代で、そこから長岡の倹約の精神が始まったことが文献上確認できた。

また、森鴎外は、大正５年に『高瀬舟』を書き、知足と安楽死をテーマとしている。

以下では、上述したものを、より詳細に調べることにしたい。

①　老子

一般的に知られている「足るを知る」は『老子』の第３３章である。辞書にも出てくるのはこの「足るを知る」である。『老子』には第３３章、第４４章、第４６章の３ヶ所に「足るを知る」が出てくる。

第３３章には、「足るを知る者は富み、強(つと)めて行なう者は志有り」と出てくる。（持っているものだけで）満足することを知るのが富んでいることであり、自分をはげまして行動するものがその志すところを得るという意味である。しかし、森（1978）は、この章に出てくる、‘「足るを知る者は富む」という言葉は前後の句とはあまり必然的なつながりはない。あるいは昔からあった格言であったのかもしれない’と指摘している[1]。

第４４章には、「足ることを知れば辱(はずか)しめあらず、止(とど)まることを知れば殆(あや)うからず。以(もっ)て長久なる可(べ)し」と出てくる。（どの程度で）満足すべきかを知れば、屈辱を免れ、（どこで）とどまるべきかを知れば、危険に出あわないという意味である。この章で老子は名声欲の否定をしている。‘老子には生きることを尊び、長生を望ましいとする思想があるといわれる。生存ということが人間にとって本質的なものである以上、これは当然のことである。そのためには生命の自然に反する欲望を去る必要が生まれると老子は考えている’と森三樹は解説している[2]。

第４６章には、「禍(わざわい)は足るを知らざるより大なるは莫く、咎(とが)は得んことを欲するより大なるは莫し」と出てくる。満足することを知らないほど大きな災いはなく、（他人のもちものを）ほしがることほど大きな不幸はないという意味である。この章では前半に戦争のことを述べており、老子が生まれたのは春秋時代であり、当時の中国は様々な勢力があり、争いもたびたび起きていたようなので、その物欲は領土欲を特に意識しているのかもしれない。

②　仏教

仏教にもいくつかの経典に「足るを知る」が出てくる。よく知られているのは『遺教経(ゆいきょうぎょう)』であり、ここでは『遺教経』の「足るを知る」について説明する。

遺教経には、「比丘(びく)達よ、もし諸々の苦悩から脱却せんと思うならば、よく知足（の教え）を観じよ。「知足」という教えは豊かで安楽、安穏なるものである。足ることを知る人は、地面で寝るような暮らしを送っていても、なお安楽である。足ることを知らない者は、豪勢豪奢な家で暮らしていたとしても、まだ満足がいかない。足ることを知らない者は、裕福であっても（心が）貧しい。足ることを知る人は、貧しくとも（心が）豊かである。足

ることを知らない者は、常に（モノ・音・臭い・味・肌触りに対する）五つの欲望に振り回され、足ることを知る者の憐（あわ）れまれる。これを知足と名づける。」と出てくる。遺教経は仏教の祖である釈迦の最後の説法であり、根幹には、「八大人覚（はちだいにんがく）」[3]という悟りを得るためにたもつべき八つの条件・意識があり、「知足」はその中の一つでもある。

遺教経にはさらに、「欲することを少なくすること」という意味の「少欲」という言葉があり、この「少欲」は八大人覚の一つでもある。この「少欲」と「知足」を合わせた「少欲知足」という四字熟語もある。「あまり、いろいろな物を欲しがらず、現在の状態で満足すること。 欲望を全て、消してしまうのではなく、欲張らないで、与えられた現実を素直に受け入れること。」という意味である。

③　徳川光圀

京都の龍安寺には徳川光圀が寄進したとされる、「知足の蹲踞（図５）」というものがある。蹲踞とは茶室に入る前に手や口を清めるための手水を張っておく石のことである。丸い石の造形物の真ん中に、四角があり、その周りに、五、隹、止、矢の４文字が彫られている。おもしろいのは、この４文字に真ん中の四角、つまり‘口’という字を足すと、それぞれ吾、唯、足、知という字に代わるということである。もちろん、その意味は字のごとく‘吾唯足るを知る’という意味である。その意味合いから石庭の石が「一度に１４個しか見ることができない」ことを「不満に思わず満足する心を持ちなさい」という戒めでもあるといわれる。また、徳川光圀は「九分は足らず　十分はこぼれると知るべし」 という言葉を残している。九分目では足りないと思い、十分まで求めようとすれば、(水は) こぼれてしまうということであり、人に欲があるのは仕方がないが、際限なく求めることは危険だという意味である。

＜図５＞知足の蹲踞

④　森鴎外の『高瀬舟』

森鴎外の書いた小説、『高瀬舟』は、財産の多少と欲望の関係、および安楽死の是非をテーマとしている。ここでは小説のあらすじを簡潔に紹介したい。京都の罪人を遠島に送るために高瀬川を下る舟に、弟を殺した喜助という男が乗せられた。護送役の同心である羽田庄兵衛(はねだしょうべえ)は、喜助がいかにも晴れやかな顔をしている事を不審に思い、訳を尋ねる。庄兵衛は喜助になぜそのように晴れやかな表情をしているのかを尋ねると、喜助は苦しい生活から一転、皮肉にも罪人となることで、食事をもらえるようになり、流刑先での生活費までもらえるようになり、晴れ晴れとしている。あの極貧生活に比べれば、十分すぎるほどの待遇をしてもらっていると答える。満足している様子に、船守りの庄兵衛 は、「足るを知る」境地にいるような喜助に、人生というものを考えさせられる。その考えが高瀬舟の本文には、「庄兵衛はただ漠然と、人の一生というような事を思ってみた。人は身に病があると、この病がなかったらと思う。その日その日の食がないと、食ってゆかれたらと思う。万一の時に備えるたくわえがないと、少しでもたくわえがあったらと思う。たくわえがあっても、またそのたくわえがもっと多かったらと思う。かくのごとくに先から先へと考えてみれば、人はどこまで行って踏み止まることができるものやらわからない。」と出てくる。

このように高瀬舟には、‘足るを知る’という言葉は出てこないが、その考え方は出てくる。文豪森鴎外が我々に残したかった大きなメッセージだったと受け取りたい。

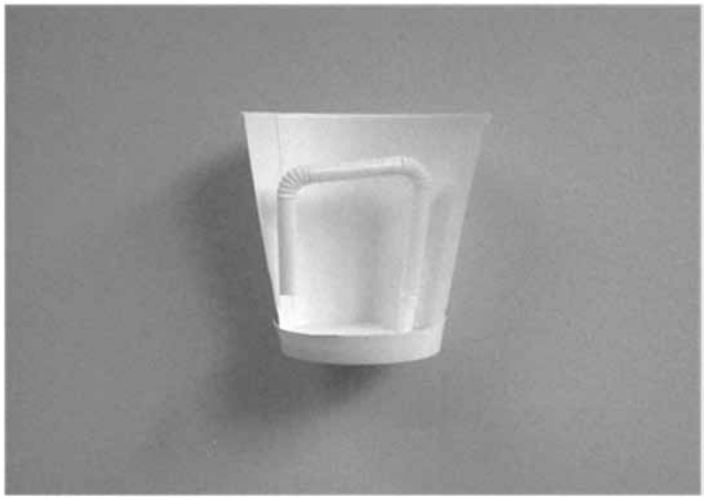
２．３　杯の構造

この＜図６＞を見ると、飾りの内部に通っている管の曲がっている部分が、器の八分目になるように作られている。この八分目の曲がっている部分より多く液体を注ぐと、後述するサイフォンの原理が作用して、すべての液体がこぼれてしまう仕組みになっている。そして、權ゼミナールでは、広報活動の際に紙コップとストローを使って十分杯の仕組みがわかる模型を市民にプレゼントしてきた。

＜図６＞十分杯の断面図

（資料）長岡在住の陶芸作家の岡崎宗男氏が製作したもの

＜図７＞權ゼミナールが作った紙コップ十分杯



２．４　原理

十分杯にはサイフォン（ギリシャ語でチューブ、管）の原理というものが応用されている。十分杯の底から水が漏れるのを理解するには、このサイフォンの原理というものを理解しなければならない。

サイフォンの原理とは、サイフォン（チューブ、管）を使って、高いところの水を低いところへ移すしくみのことである。液体の量が少ないのであればこの原理を活用する出番は少ないが、量が多くなれば管一本で解決できる非常に便利なものである。

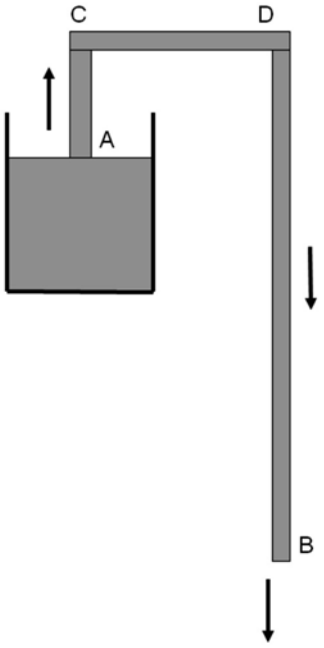
このサイフォンの原理を理解するために、まず、コップ（入れ物）の中の水を外に移すにはどうしたらいいかを考えてみよう。方法は２つしかない。一つは、コップを傾けてやる方法である。もう一つの方法がこのサイフォンの原理を活用することである。コップ（入れ物）の中に外と通じるパイプをつなげることだけで完成となる。ただし、人間が手に取ることができるコップの場合はコップを傾ければいいが、貯水池のような非常に大きな入れ物の水を移動させるにはどうしたらいいかを考えてみよう。まず、傾けることは不可能である。そうなると、サイフォンの原理だけが残る。パイプにはパイプの中が水でいっぱいになるようにモーターを付ける必要がある。そうすると、傾けずに殆どすべての水を出すことができる。十分杯の場合は、パイプを隠すために飾りとなっているのである。つまり、飾りの中を管が貫通しているのである。

以下では、サイフォンがどのようなどのような理屈で働くかについてこれまでに行われてきた説を３つほど紹介したい。

２．４．１　大気圧説

まずここでは、約３５０年間大気圧説が最も有力な説であったことと、近年、それは間違いだったことが解明されたことを紹介したい。松田卓也（2013）は＜図８＞を使って大気圧説を否定している。「上部の液面 A と下部の液面 B に働く大気圧はほとんど同じである。だからこの二つの圧力差で流れを起こすことは出来ない。さらに言えば、大気圧はわずかながら下部の B 点の方が高いのだから、大気圧の差によるなら流れは逆になるはずだ。つまりサイフォン現象を大気圧の作用で説明できないのは自明に思える。」

＜図８＞サイフォンと大気圧説



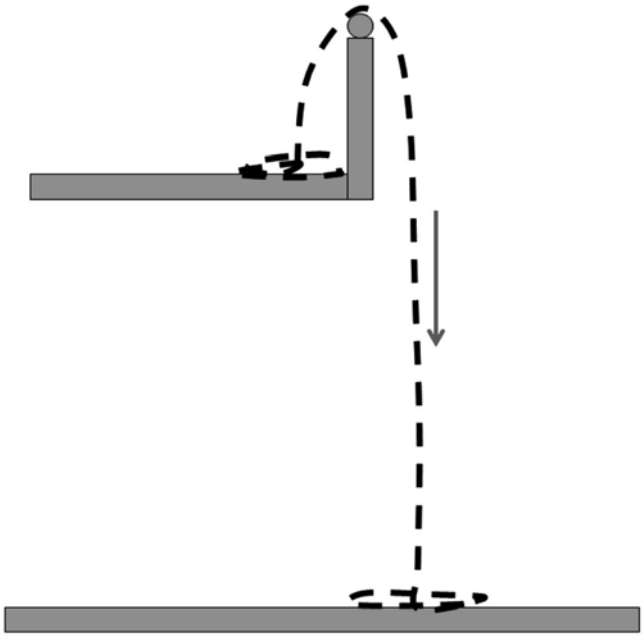
（資料）松田卓也（2013）p. 3

２．４．２　水分子の鎖説

2012 年 12 月に宮地祐司氏から『サイフォンの科学史―３５０年間の間違いの歴史と認識』という本が出版された。本の要点は、大気圧説を否定して新たに水分子の鎖説を持ってサイフォンの原理を説明しようとしたのである。では、水分子の鎖説とはどのようなものかを見てみよう。以下の文章は前掲の松田卓也の説明文を紹介したい。

「鎖モデルとは、サイフォン内の水を一連のちぎれない鎖あるいは糸のようなものだと考える。＜図９＞で右の長い部分の鎖は、左の短い部分の鎖より重いので落下して、左の部分の鎖がそれにつられて引き上げられるというモデルである。水が鎖や糸、あるいはボールチェインのようにつながったものなら、それも良いだろう。実際、私はボールチェインで実験してみたらうまく働いた。しかし水は鎖とは違う。引っ張るとちぎれるのである。しかし前掲書（宮地祐司（2012））によれば、水分子の凝集力は大きいので水がちぎれないと主張している。それは流体力学の常識と相容れない。」としている。要点だけいうならば、水分子の鎖説は個体では説明できるが、肝心な水には適用されないということであり、説明として正しくないことを主張している。

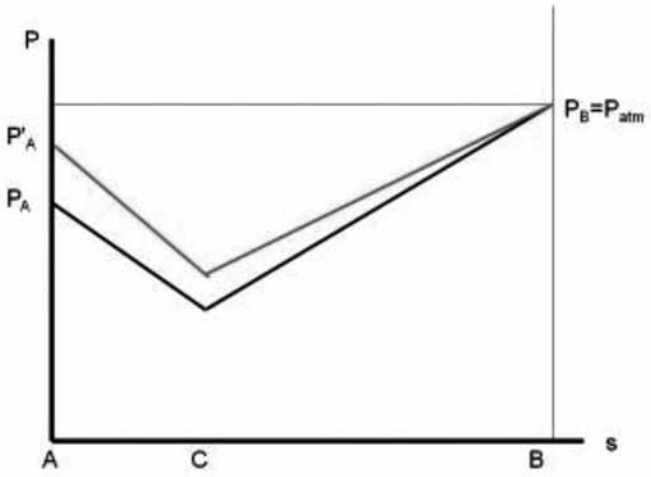
＜図９＞水分子の鎖説のイメージ図



（資料）松田卓也（2013）p. 4

２．４．３　圧力差説

＜図 10＞サイフォンの２点における圧力差



（資料）松田卓也（2013）p. 7

そして、前掲の二つの先行研究を否定した松田卓也氏が新たに主張したものが圧力差説である。以下では、同氏の原稿をそのままの形で引用したい。

「問題を簡単にするために、サイフォンの最下端が大気中に解放されている場合、つまり＜図６＞のケースを考える(2013/12/22 これも本質的ではないが、理解促進のためにそう仮定する)。この場合、B 点における圧力は大気圧 Patm であると仮定して問題はない。すると管内で静水圧平衡を仮定すると、管内の圧力分布は＜図７＞の黒線のようになる。この場合 A 点における圧力は大気圧にならず、それより低い値 PA=Patm−ρgH になる。(2013/12/22 管の入り口を栓で塞げば、この圧力分布は実現する。つぎに栓を開くと、その圧力差で水が管の中に吸い込まれる。これがサイフォンの駆動力と説明することも出来る。)そこで管口 A における圧力は大気圧より低いという事実をそのまま受け入れるのである。すると周囲の水の圧力は大気圧に近いであろうから、管口付近で有限の圧力差が生じる。その圧力差のために、周りの水が管口に吸い込まれるのである。ビーカー内のその付近の流れを解析するには、もはや非線形項を無視するわけにはいかない。サイフォンを流れる水流の流速を求めるには、水面付近を出発して管口に吸い込まれるような流線を考えて、そこでベルヌーイの定理を適用する。水面付近では流速は 0 で、圧力は大気圧であることを考慮すると 0+ρgH+Patm=ρv^2/2+ρgH+PA 故に PA=Patm−ρv^2/2 それが先に求めた値と等しいから PA=Patm−ρv^2/2=Patm−ρgH つまり v^2=2gH となり、トリチェリの定理で得られる流速と等しくなる。(2013/12/22 この速度は自由落下速度である。)実際の流速は管壁の摩擦のため、先の速度より少し遅くなるであろう(ケースにもよるが、摩擦が大きく効く場合は、速度は少しではなく、大きく減少する。)しかし摩擦による圧力損失のために、実際の 圧力分布は図７の赤線のようになるであろう。具体的な流速を計算するには(層流の場合)2 次方程式を解けばよい。(乱流の場合は、むしろ簡単。)その結果は、ここでは示さないが、先の速度よりは遅くなる事が分かる。」

要するに、＜図８＞の管口Ａ点における大気圧はその周辺の大気圧と比べ低いため、水は圧力が低い管口Ａ点に向かって移動し最終的には管に吸い込まれるという主張である。ところで、私たちがまだ十分理解できていないところがある。それは、なぜ、管口Ａ点とその周辺の水面の間に圧力差が生じるからである。これ自体が新たな説であるのと同時に私たちもこれに接したのが１２月の上旬だったということも原因である。今後の課題として真剣に取り組んでいきたい。

２．５　ルート

十分杯と長岡とのかかわりは約３００年になる。長岡に十分杯が入ってきたのは１６８７年（貞享４年）頃である。この時の藩主が長岡藩の内治整備の英主といわれている三代藩主の牧野忠辰（１６６５～１７２２）であった。

この時の十分杯と忠辰のエピソードについて書かれているもので一番多いものを紹介する。元禄時代になり、今まで質素倹約を心掛けていた藩士たちにゆるみが出てきてしまった。これを十分の杯を作らせ、十分杯を使うことによって藩士たちの引き締めを図った。十分杯という杯は径二、三寸ほどで杯の中央には柱が経っていて中に細い管が通っており、小さな穴が杯の内外にある。」このような文章は本によっても多少違うが、どの本にも共通している点がある。それは「牧野忠辰が十分杯を作らせた」という点である。アドバイザーの内山弘氏（長岡歯車資料館長）のお話を聞くと実際はこの文章は間違いであることが分かった。牧野忠辰が作らせたという文章ではまるで十分杯という杯を忠辰が考え、作り出したようになってしまっている。しかし十分杯というものはこの時代には既にお土産物として売られていたそうだ。そのお土産を塚越氏（おそらく庄屋）という方が和泉の国で手に入れ、忠辰に献上した。十分杯をたいそう気に入った忠辰は十分杯について詩を詠み、その詩を書記官に書かせた。

では、十分杯はもともと日本にあったものだろうか。いや、そうではない。日本が発祥の地ではないのである。世界中にサイフォンの原理が使われている杯が名前は異なるものの、多数残っている。では、十分杯はどのようなルートを通って日本に伝わったのだろうか。

十分杯の発祥の地はギリシャのようである。日本に伝えられるまでのルートは正確なことはわかっていないが、①ギリシャ→シルクロード→中国→琉球→日本、②ギリシャ→シルクロード→中国→朝鮮半島→日本の二通りのルートだと考えられている。その根拠は各地に十分杯と同じ仕組みのカップや杯が存在しているからである。

以下では各地のサイフォン杯を写真と一緒に紹介したい。

２．５．１　ピタゴラス杯

十分杯の起源は約２５００年前のギリシャの数学者で哲学者でもあったピタゴラスにあると言われている。そのため、この杯には彼の名前がついている。長岡の十分杯との違いは飾りには特徴がなく、杯の外側に絵が描かれていることがある。因みにギリシャでは観光商品として定着しており、2015 年１月現在約３０米ドルで販売されている。

＜図 11＞ピタゴラス杯

（注）世界的インターネットショッピングモールの eBay のイタリアのサイトで Pythagoras または Pythagorean と検索すればいくつかのピタゴラス杯の写真が表示される。

２．５．２　中国の欹器

中国にもサイフォン杯はある。ところが中国の歴史に記録されている‘足るを知る’という教訓を伝えていたのは今のサイフォン杯とは形が異なるが、戒めの杯としては、もっとも古いものといえる。ここでは、面白さよりは教訓を重視し、欹器を紹介したい。

欹器は日本語ではイキ、中国語では yi1qi4（イーチ）と発音する。そして、宥坐之器（ユウザノキ）という別の名称もある。つまり坐宥の銘とはここから生まれたのである。

この欹器が有名になったのは孔子(紀元前 551-紀元前 479)にまつわるからであるが、荀子（じゅんし）の宥坐編に紹介されている逸話を紹介したい。

孔子は弟子たちと一緒に魯国にあった桓公の廟を参拝しに行った時に、儀式の際に使う儀器を目にした。ところが、形が変わっており、その所以について廟守りに聞いた。

孔子：“あれは何の器ですか。”

廟守り：“桓公（?-BC643、中国の春秋戦国時代の齊国の王だった人物。 当時の中国には約 3,000 の大小の国があったが、その中でも大きな国は五つほどだったようである。 それらの国を春秋五覇と言ったが、齊国もそのうちの一国だった。そして、桓公はその齊国の君主だった。仲がいつも近くに置き、座右の銘にしていらっしゃった器（宥坐之器；宥という字は一般的に許すという意味がありますが、 右の意味もあります。それで、いつも右において心の乱れが生じたときに見る物という解釈ができるのではないかと思う。）である。

孔子：“わかった。それの使い方がわかった。

孔子は弟子たちを見回りながら、語った。

孔子：“水を器に注いでみなさい。”

一人の弟子が水を汲んできてゆっくりと注いだ。みんな息を飲んで見ていた。

空っぽの器は水が少し入ると、傾き始めた。そして、 器の真ん中まで水が入ったら安定して正しい形になり、 器がいっぱいに近づくや否やひっくり返ってしまい、中の水が全部消えてしまった。

皆、大変珍しくまた、面白くて何も言えず、孔子を見るばかりだった。孔子は手を打ちながら感嘆した。

孔子：“そうだね。世の中には満ちてひっくり返らないものはないものだね”

子路：“先生、この器が空いていたときは傾いており、 真ん中ぐらいに水が入っていたときは正しく立ち、満ちた時はひっくり返ってしまいましたね。ここに何の道理があるのでしょうか。”

孔子が弟子に答えた。

孔子：“そうとも。人もこの傾いた器と同じである。 聡明で博識な人は自信の愚かな面を見なければならないし、功績が高い人は謙虚で遠慮しなければならない。また、勇敢な人は恐れなければならなく、豊かな人は節約しなければならない。謙虚に退けば損をしないということもこれと同じ道理だ。”

（資料）『荀子』の宥坐編

要するに、欹器は、心の乱れが起きることを戒めるために近く（右）に置いておく物である。そのため、その教訓として「足るを知る」が強調されている。人間を動かすのは利害であり、その根底には欲がある。ところが、その欲が身の程を過ぎてしまったら、それまでの貯えが全部消えてしまう恐ろしい状況になってしまう。腹八分目という言葉はまさに十分杯のメッセージと重なるところがある。かといって、何もかも遠慮するということはないだろう。あくまで身の程を知り、自身を戒め、節制するということに尽きる。

＜図 12＞中国の欹器

＜図 13＞朝鮮半島の戒盈杯

（注）この欹器は長岡歯車資料館館長内山弘氏が製作したものである。

２．５．３　朝鮮半島の戒盈杯

朝鮮半島にどのようなルートで伝わったかは不明だが、長岡の十分杯と全く同じ仕組みの杯がある。ただ十分杯は飾りの種類が非常に多いが戒盈杯はそうでもなく、飾りを楽しむことはあまりないようである。ところが青磁（せいじ）や白磁（はくじ）であるため、非常に品がある。また漏れて落ちてくる酒をためておく入れ物がついているのも特徴の一つである。その名は‘盈る（みちる）ことを警戒する’という意味を持つ戒盈杯（ゲーヨンベ）日本の読み方では「かいえいはい」である。記録上では、朝鮮の後期に作られたようである。白磁職人が大もうけをした後、酒や女遊びにふけたあげく、多くのものを失ってしまった。そこで、初心に戻り、全身全霊で作り上げたものが戒盈杯だと言われている。それが歴史ドラマとして放映され、多くの人々が見たようである。また、朝鮮後期の巨商が自身を戒めるために常にそばに置いたとも言われている。 韓国では、政治家からのプレゼント、新婚さんへのプレゼントとして普及し始めているようである。しかし、まだまだ日本同様、知名度が低いのは同じようである。

２．５．４　石垣島の教訓茶碗

教訓とは‘欲張り過ぎるとすべてを失ってしまう’や ‘欲張りすぎるとしっぺ返しがくる’という古人の教えのことである。その「教訓」がそのまま茶碗としてカタチになったのが教訓茶碗である。

〈図 14〉石垣島の教訓茶碗

〈図 15〉山形県の八分杯

教訓茶碗には【宮良殿内（みやらどぅんち）の「八分さかずき」】として以下のような物語が伝えられている。

約 230 年前石垣島に宮良殿内に渡来物として贈答された 1 個のさかずきがあった。8 分目以上にお酒を入れると底からスーと抜けてしまう。この不思議さに宮良家では家宝同様に扱って大切に保管してきた。とはいっても来客にはこれを見せ、あるいは使って「驚き」を分かち合い「教訓」話のネタにしていたからタダの家宝ではない。コミュニケーションの手段としても大いに役立っていた。だから石垣島をはじめとする沖縄では宮良殿内の「八分さかずき」として知る人ぞ知るものであった。これもピタゴラス杯同様観光商品として売られている。

２．５．５　山形県の八分杯

山形県では「八分杯」という名となっている。非常に分かりやすい名である。

その昔、とあるお殿様が家臣の欲をいさめる為、考え出されたと言われている。もしかするとお殿様とは長岡藩３代藩主のことだったかもしれない。八分杯の意味は「腹八分目」から来ており、家臣が腹を満たそうと欲張って注ぐとサイフォンの原理によりお酒が下の穴から全て流れ落ちてしまう様に作られている。飾りになっているものが違うだけで基本的には「十分杯」と最も近い。名前だけが違うのである。

２．６　十分杯の名称

私たちが広報活動でよく聞くのが十分杯という名前についてである。具体的には、‘「八分の杯」ではないか’という質問である。そういう質問が出たら私たちは決まって十分杯銘を取り上げ３代藩主が十分杯と命名していることを伝えてきた。しかし、３代藩主がなぜ、八分ではなく、十分としたかはわからない。ここでは、それについて推測の域を出ないが、推理してみたい。

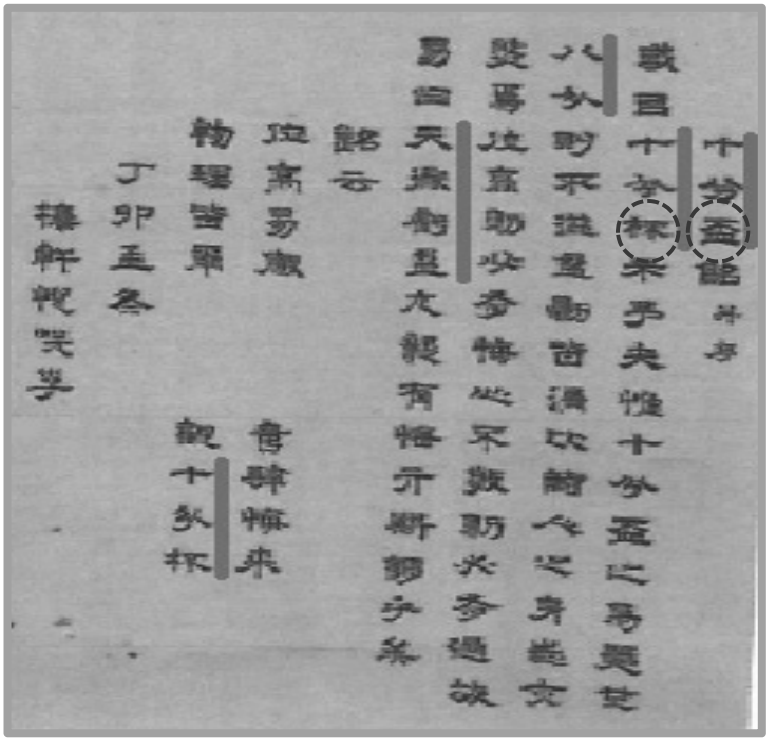
もともと「十分」は同じ発音で「充分」という単語がある。「十分」は‘１０割、１００％’の意味があり、「充分」は‘必要なだけ、enough’の意味が込められている。つまり、「充分」は必ず１００％でなくてもその人がいいと思うのであればそれでいいという意味がある。

そうすると、発音は「十分」からとり、意味は「充分」からとったのではないかと推論している。つまり、十分杯は教訓がある杯であるが、その教訓とは自身にとっての「充分」を理解することなのである。

２．７　杯と盃

現在、長岡市内で十分杯は２種類の字が使われている。「十分杯」と「十分盃」である。‘どちらが正しいのか、どのように違うのか’という質問をよく受ける。その際に、私たちは、また『十分杯銘』を取り上げてどちらも正しいと説明してきた。銘にも両方の漢字が混ざって使われている。二つの字の違いは、‘杯’が正字で‘盃’は異体字である。それ以外の違いはない。

＜図 16＞長岡藩３代藩主牧野忠辰公の十分杯銘に出てくる杯と盃



３．長岡と十分杯の関わり

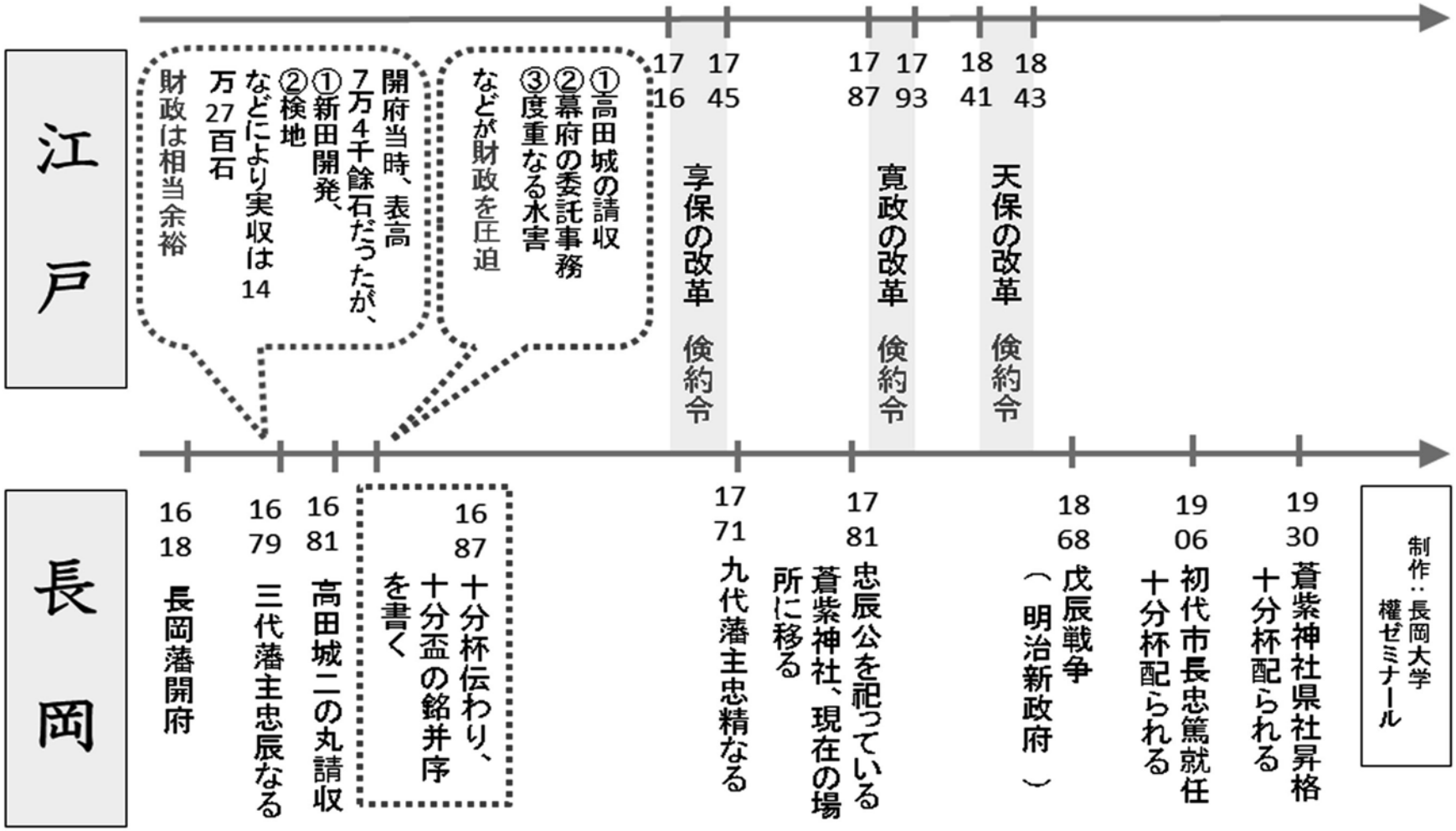
３．１　江戸時代

今年の活動の中で最も収穫が大きかったのは歴史部門である。昨年度は３代藩主の人物像に注目したが、今年は‘十分杯が大事にされなければならない時代的背景’について集中的に追求した。その結果は年表作りであった。

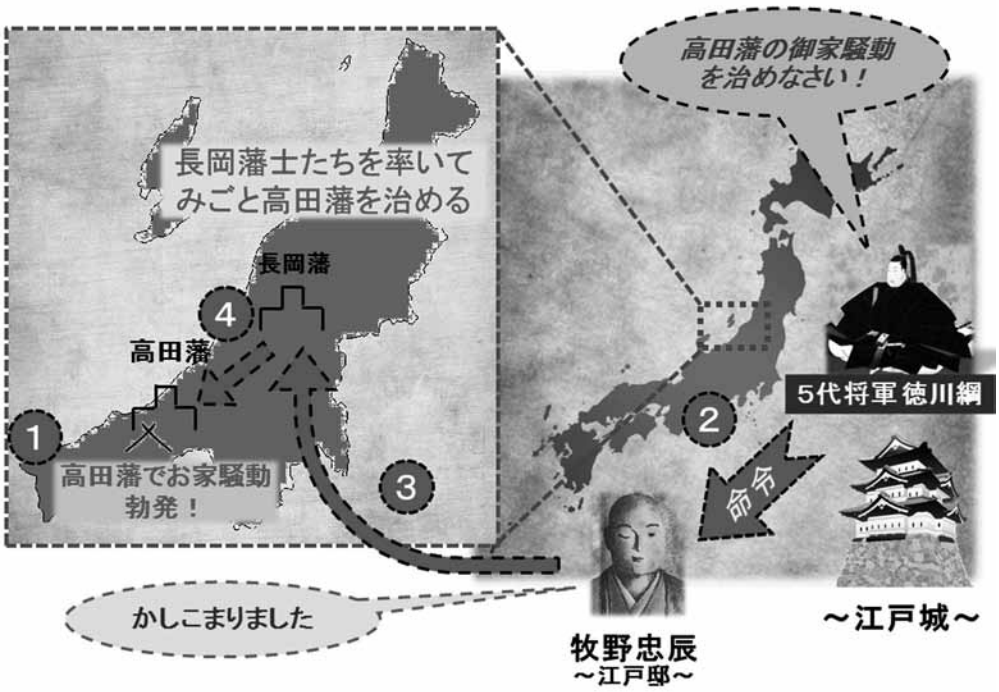
最初に、＜図 17＞は、十分杯と長岡との関わりを年表にしたものである。江戸と長岡に分けたのは、江戸からの影響を見るためである。以下では、十分杯と長岡がどういった関係なのかを江戸時代と近現代に分けて説明する。まず江戸時代の十分杯と長岡の関わりについて説明する。十分杯は、江戸時代以降の長岡藩との関わりが深かったと推定される。今から約４００年昔、長岡藩が開府する。長岡藩の財政は、開府当時、表高は年間 7 万 4 千石だったと言われていた。しかし、その後の新田開発や検地などにより、実際はその約２倍の 14 万 27 百石であることがわかった。開府してからしばらくの間の財政状況はかなり余裕だったと推定される（蒲原・坂本(1980)p.89)。そういった時に、高田藩で越後騒動[4]が勃発する。

1681 年、当時長岡藩の藩主だった牧野忠辰に高田城二ノ丸請収（せいしゅう）、そして、それに伴う高田藩の運営の命が下る（＜図 18＞参照)。当時、江戸の長岡藩邸にいた彼は、急ぎ長岡へ戻り、高田に出兵した。この出兵は長岡藩にとって財政的には大きな負担となった。このことに加え、長岡ではこの頃、水害[5]が多かったようである。ちなみに、江戸時代を通して長岡城まで浸水する事が 7 回もあったと言われている。中小の氾濫を含めるとかなりの回数に及び、6 万 6 千石強の損害になった事もあったようである（長岡市史編集委員会近世史部会(1992)p.34-35)。主に、高田藩の請収、それに伴う高田藩の管理運営、度重なる水害、以上の３つの事が原因で、開府当時は余裕だった財政も厳しくなっていた。ちょうどその頃、大阪の商人が長岡に十分杯を持ち込み、忠辰が知るところとなった。忠辰は、三河[6]からの「倹約」「戒め」といった精神を持っていた。そして、十分杯には、この精神に似た「足るを知る」という精神が込められている。これが、忠辰の心に響いたのではないだろうか。忠辰は、十分杯に『銘』という形で言葉を残した。

＜図 17＞十分杯と長岡に関する年表



＜図 18＞　越後騒動における関係図



３．２　明治時代以降

次に、近現代の十分杯と長岡の関係を説明する。時代が下って、1906 年、長岡市が誕生する。そして、長岡市の初代市長に牧野家の１４代目の当主、牧野忠篤が就任する。戊辰戦争に敗れ、長岡は焼け野原となっていた。如何にして長岡の復興と近代都市への発展を実現するか。この苦境に、彼は歴代の藩主たちの教えを深く心に刻んで臨んだ。彼は、明治時代の日本を代表する陶芸家の宮川香山（みやがわこうざん）に、十分杯の作成を依頼し、この十分杯に込められた精神を座右の銘として、事に臨んだのである。そして、忠篤は十分杯を貴族に配ったようである。以降、長岡では、事の節目や、記念品として十分杯を配る事が文化の一つになった。例えば、

・坂之上小学校の１００周年記念で配られた「鳩」の十分杯
・長岡高校の１４０周年記念で、同窓会で配られた「龍」の十分杯
・北越銀行の１１０周年記念で作られた『松竹梅の十分杯』

などがある。また、最近は結婚式、祝い事などの引出物として贈られる事もあるうえ、商品開発も進んでいる。

＜図 19＞長岡初代市長の依頼で
宮川香山が作った十分杯

＜図 20＞蒼紫神社の県社
昇格記念に製作された十分杯

＜図 21＞北越銀行
１１０周年記念の松竹梅杯

＜図 22＞坂之上小学校
１００周年記念の鳩杯

＜図 23＞長岡高校１４０周年を記念の龍杯

＜図 24＞陶芸愛好家による河童杯

３．３　長岡との歴史的関わりを調べた感想

正直に言って、十分杯というのは一見地味な文化である。しかし、その裏にある歴史や教訓を知る事で、見え方も変わるだろう。ただ「足るを知る」が大事だと言っても説得力が無い。「ほどほど」がいいと言っても鬱陶しく感じる。大事なのは「なぜそれが大事であるか」という事である。米百俵にしてもそうだろう。小林虎三郎の「百俵の米も、食えばたちまちなくなるが、教育にあてれば明日の一万、百万俵となる」という言葉がある。これも、ただ言われただけでは堅苦しく感じる。しかし、戊辰戦争後の彼の物語を知ることで、この言葉の意味を深く理解する事ができる。現代に残る有名な言葉や格言は、それを言った人が生きた時代やその環境の中で、必然性があって言ったからこそ残るものだと思う。それを知ることで、言葉をより深く理解できる。今回十分杯と長岡の歴史と物語を書いたのも、このことを補うためである。まだまだ研究不足ではあるが、十分杯という文化を多くの人に知ってもらい、広めるという目標に向かって一歩前進したように思える。

４．今年度の活動紹介と成果

４．１　昨年度までの活動

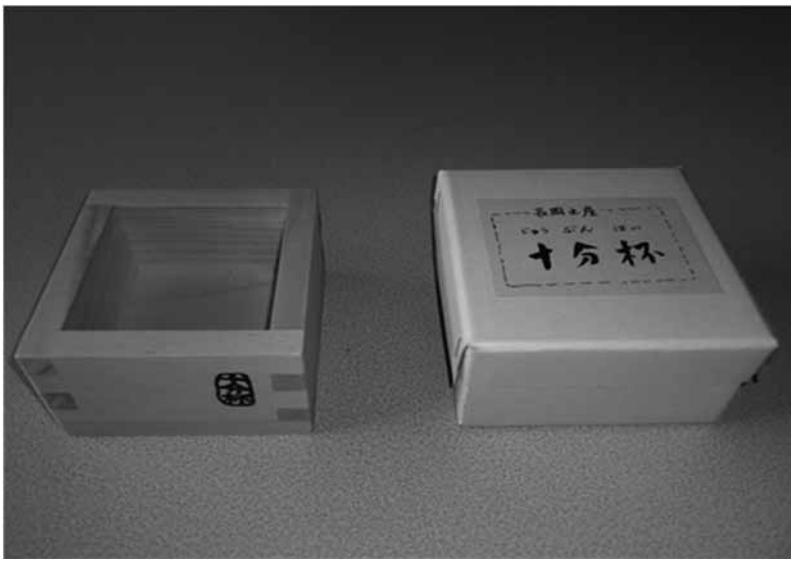
以下では、權ゼミナールと十分杯との出会いについて触れておきたい。權ゼミナールは２０１１年度の春から長岡藩と深い関わりがあり、からくり杯でもある十分杯の広報活動を行ってきた。そして、その翌年の２０１２年度からは長岡大学独自の教育プログラムである「学生による地域活性化プログラム」の参加ゼミの一つとして活動してきた。そもそもこのゼミ活動は、「十分杯を題材にして長岡市を盛り上げるために使うことができるのではないか」、という問題意識のもとでスタートした。しかし、この十分杯という杯のことを２０１１年度の３、４年生は初めから知っていたわけではなく、見学先の企業での偶然の出会いが活動を始めるきっかけとなったのである。

当初、權ゼミナールは‘現場から経済を学ぶ’ということで、長岡市内の企業見学をゼミナールの主な活動としていた。そして、たまたま２０１１年に見学先としてから長岡市南陽２丁目にある長岡歯車製作所の長岡歯車資料館を訪れた。この時の目的は多くの機械に欠かせない歯車について勉強することと、長岡の機械工業史を勉強するためだったようだが、見学の最後にお土産として販売されていた資料館の館長内山弘氏が自ら製作した珍しい酒枡＜図 25＞と同じものを紹介された。この時の酒枡が十分杯だった。

実は十分杯はあまり長岡市民に認知されてはいないものの、私たちが普段生活している長岡と関わりが非常に強いことも訪れた先輩達を驚かせた一因だったようである。

そして、内山弘館長が十分杯を広める活動をしていると聞き、一緒に活動し、お手伝いをしようと何かできることはないだろうかと考え、出来る限りの広報活動をすることを決めたそうである。この時点では「長岡市民の十分杯に対する認知度アップ」と「十分杯関連の商品化」という目標を掲げ活動を行っていた。

＜図 25＞木の枡の十分杯



（注）長岡歯車資料館館長内山弘さんが製作した木の枡の縁にサイフォン原理を仕組んだ十分杯である。特許取得済み。

昨年度まで３年間の活動を表にしたものが＜表１＞である。この３年間は十分杯がどのようなものかが全くわからない状態からの出発であり、そういう意味で基礎知識を固めるためのものだった。また、もう一つ大事なことは、広報活動にはどのような人が来るかが全くわからない。そのため、誰に対しても人と話し合える力をつけばければならなかった。大人からしたら大したことではないかもしれないが、私たち学生にとっては恥ずかしさとの戦いでもあり、緊張の連続なのである。そのため、広場での広報活動は試練の場でもあり、鍛えの場でもあり、とにかく、大変である。

＜表１＞２０１３年度までの權ゼミによる十分杯の広報活動の内容

日付	場所	イベント名・活動内容
Ｈ２３，６月１４日	長岡大学	ヒューマンパワーアップ プロジェクト
１０月２２，２３日	長岡造形大学	長岡デザインフェア２０１１
１０月３１日		十分杯ＨＰ作成
１１月１９日	フェニックス大手イースト	まちなかキャンパス
Ｈ２４，５月から 毎月８日	アオーレ長岡	オープニング記念市民交流事業
６月１２日	長岡歯車資料館	アドバイザーの方々へ十分杯の取材
７月２４日	長岡郷土資料館	長岡郷土資料館の見学
１０月６日	アオーレ長岡	うんめぇ酒にアオーレ ～越後長岡酒の陣～
１２月２０、２２日、 Ｈ２５，1月８，９日	アオ―レ長岡	アンケートの実施
Ｈ２５，２月	アオーレ長岡	地物関連のイベントでの活動
H２５、１０月５日	アオーレ長岡	うんめぇ酒にアオーレ ～越後長岡酒の陣～
H２５、１０月２６、２７日	長岡大学	悠久祭にて展示会
H２５、下半期	長岡大学	長岡大学学食脇に十分杯を常設展示

＜図 26＞飾りつけした長岡大学学食脇のショーケース

（注）このショーケースの中にある十分杯は約５０点しかないが、それでもおそらく、世界で最もサイフォンの構造を持っている杯の数が多いと思われる。

４．２　今年度の活動

４．２．１　アオーレでの広報活動

今年度の活動は５月ごろから始めた。最初の活動場所はアオーレ長岡のナカドマで非常に緊張したが、回数を重ねていくにつれ、慣れてきたということもあり、次第に全体的にスムーズに運ぶことができた。また、自分たちが説明をしていく中で、どの部分をより勉強する必要があるかも来られた方たちとの会話の中で自然とわかるようになった。

＜図 27＞広報活動を掲載してくれた長岡新聞の

４．２．２　長岡酒の陣での広報活動

＜図 28＞越後長岡酒の陣での広報活動

3 年連続となったが、長岡市から 10 月 4 日の酒の陣のイベントに誘われた。1 日だけだったが、とにかくすごい人ごみだった。また、昨年と違い、立派な看板も用意していただいた。なお、スペースも非常に広かったため、壁には今年度に新たに作った年表やサイフォンの原理についてのイメージ図を掛けることで、人込みの中で少々離れた場所からも見えやすいように工夫した。今年度も多くの人がアオーレ長岡に来場したが、アドバイザーの内山さん、太刀川さんのご協力で何とか無事に終えることができた。

４．２．３　十分杯会議の立ち上げ

＜図 29＞十分杯会議の様子

何といっても今年の最大の特徴は長岡大学の大学祭である悠久祭期間中に開催された「十分杯会議」の立ち上げである。なぜ、これを立ち上げる必要があったのかということからまず触れたい。これまでにすでに、3 年間活動をしてきたが、權ゼミナールの目標としては「商品化」がある。なぜなら、認知度が上がることが地域経済のプラスにつながる

かに確信が持てなかったからである。しかし、認知度は高めなければならないし、それと並行して商品化も進める必要があると判断したからである。このような考えの下で、地域活性化の成果発表会の場で、商品化を毎年提案してきた。しかし、何の反響もなかったのである。

ところが、よく考えてみると、それは当たり前の結果である。なぜなら、その場に来られる方々は非常に限られた方たちであり、ビジネスと無縁の方が圧倒的に多い。木に登って魚を求めるのと同じことであることにやっと気づいた。そこで、商品化と直接かかわりのある方に大学に集まっていただき、私たちが何をやっていてどのような商品化のアイディアがあるかを披露しようと考えた。そして、ゼミのアドバイザー、市議会議員、製菓企業、雑貨屋、長岡土産グッズ製造企業、長岡観光コンベンション協会の方々に来ていただいた。

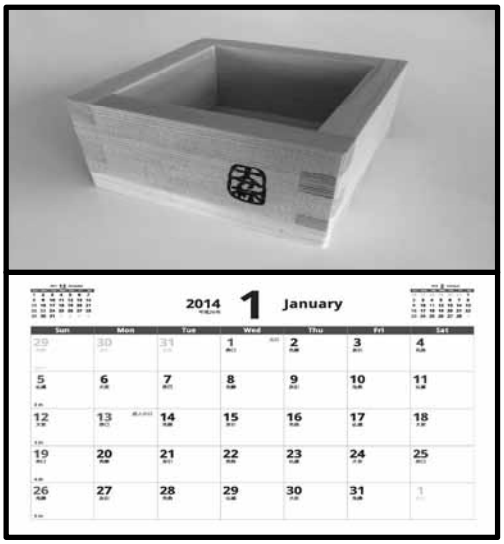
2 部構成で会議を進めた。非常にこれまでにない緊張感があった。新聞記者が 3 人も来ていた。1 部では、私たちの活動を紹介し、3 人が提案したいものを紹介した。2 部では、非常に真摯に討論を行った。

まず、私たちの提案をより詳細に紹介したい。

第 1 に、観光列車「越乃 Shu*Kura（コシノシュクラ）(以下、シュクラ)」と十分杯を関連付けることはできないだろうか。JR 東日本が運行する「日本酒」をテーマにした観光列車である。主に　高田→長岡→十日町　というルートで運行され、車内では県内の様々な地酒が楽しめる。また、各停車駅から沿線の観光地や蔵元をめぐるバスやタクシーに連絡しており、「シュクラで旅行」から「地域を観光する」へとつなげる仕組みが整いつつある。シュクラに着目したのは、「日本酒」というテーマに強く惹かれたからである。私たちの知る限り、これまで車内で酒類を提供する列車はあっても、日本酒そのものをテーマとした列車はなかった。このことは、独創性という点で特筆に値する。また、十分杯は酒杯であるため、このテーマとはマッチさせやすいのではないだろうか。例えば、試飲や利き酒の際に十分杯を活用することや、車内での展示などが考えられる。また、興味を持っていただけた方には車内で、販売店や、十分杯でお酒が飲める店などを紹介することで、「長岡で降りて観光してもらう」というところまでつなげることができると考える。

＜図 30＞新潟県内を走る観光列車「越乃 Shu*Kura（コシノシュクラ）」

＜図 31＞十分杯カレンダー



第 2 に、十分杯カレンダー、十分杯クリアーファイル、十分杯絵葉書、十分杯エコバッグ、十分杯クッキーなどを提案した。クッキーに関しては、ジュウブンパイという名前ではどうかという具体的な提案も行った。しかし、今のところ、これらの中から動いているものはない。おそらくその理由は市場が小さいからではないかと推測している。

第 3 に、悠久山歴史めぐり観光コースも提案した。長岡大学周辺の悠久山は長岡藩の歴史を知るうえでとても重要な場所である。郷土史料館もあり、史料館の上からの景色はなかなか見ごたえがある。最後はまちの駅でもある長岡大学の十分杯コレクションを愉しめばいい。また、散歩コースとしてもコンパクトでなかなか良い。他地域から来た人たちが隙間時間を利用して回ってみるのを強く勧めたい。ただ、これもタクシー会社やホテル、そして、旅行会社へ強くアピールしなければならない。今年度は初年度というのもあり、会議を立ち上げることで精一杯だったため関係企業に加わってもらうことができなかったが、来年度はぜひ討論の場に来てもらえるように準備していきたい。

＜図 32＞悠久山歴史観光めぐりコース

そして、ここからは第2部で行われた議論を紹介していきたい。第1に、十分杯を「長岡市指定文化財」に登録できるように努力しようということである。逆に、登録されていないのが不思議だと感じた。来年度の課題としたい。もし、これが実現できるならば知名度は一気に上がるはずである。第2に、米百表と同じく、ストーリー性が大事であるため文献研究を丁寧にすべきだという意見である。今年度に十分杯が長岡に入った当時の状況が分かったので、それに向けての基礎作りはできたと思っている。来年度以降より力を入れていきたい。第3に、安直でわかりやすいキャッチコピーを作ったらどうかという意見があった。これも商品化においては非常に大事であり、新鮮な意見だった。第4に、長岡以外の地域（例えば、牧野家の発祥の地である静岡県の三河地域）との連携はどうか。第5に、作家たちに十分杯を送り、それを作品の中に入れてもらうのはどうか。第6に、「ほどほど」を国際語にできないだろうか。第7に、十分杯大百科を作ったらどうか。第8に、十分杯漫画を作ったらどうか。第9に、外国人に知ってもらうための活動をしたらどうか。第10に、小学校で広報活動をしたらどうか。第11に、首都圏や都市部での販売はどうか。

このように、初回の会議にしては上出来と言っていいかもしれない。これを何とか来年度につなげたい。

また、十分杯会議は新潟日報から地域面に大きく取り上げていただいた。

＜図33＞十分杯会議を掲載してくれた新潟日報の記事

「足るを知る」精神
まちづくりに活用

長岡大生「会議」旗揚げ

十分杯 教育や観光資源に

「足るを知る」の精神を地域活性化につなげようと話し合われた「十分杯会議」＝長岡市の長岡大学

４．２．４　悠久祭での展示活動

悠久祭の初日は十分杯会議を開催して、翌日はゼミ室で展示会を行った。来客数は約 150 人であった。

＜図 34＞長岡大学悠久祭での展示活動

４．２．５　ブログの立ち上げ

4 年前に立ち上げたホームページがあったが、いくつかの問題があり、そのサイトを閉鎖して新たにブログを立ち上げた。検索サイトで「十分杯」で検索すると、ほぼもっとも上段に表示される。

＜図 35＞十分杯ブログ

４．２．６　成果

明確な成果が一つだけある。それは十分杯会議の席上で提案した観光列車とのコラボレーションの件であるが、長岡観光コンベンション協会の皆様のご尽力があって何と 2015 年の 3 月から春シーズンにとりあえず 4 回乗車し説明を行う機会をもらった。4 年間の活動の中でアイディアが初めて実現できたのである。今後も気を引き締めて地道に活動を邁進していきたい。

５．文化財による地域活性化の事例研究

５．１　事例研究の必要性

十分杯は文化財であるが、果たしてこのようなもので地域経済にプラスの効果を与えることはできるだろうかという疑問があり、事例を集めてみた。もう少し詳細に述べたい。

１つは、「十分杯を長岡の地域活性化に役立てたい」と考えたからである。長岡と十分杯のかかわりは古く、文化として現代まで続いている。長岡と共にあると言っても過言ではない十分杯を、地域活性化に役立てる方法を探りたい。

もう１つは、「他の地域では、文化財・文化遺産を地域活性化にどのように活用しているのか」と疑問に思ったからである。現在、十分杯は長岡市の文化財には登録されていない。しかし、その歴史の長さや、込められたメッセージから、文化財として扱われるべきだと考える。そして、その十分杯があるにもかかわらず長岡での認知度は低く、地域活性化に役立っているとは言えない現状がある。このことから「文化財の活用に取り組んでいる他の地域と長岡の違いは何なのか」と疑問を持った。これについては、実例をもとに紹介していくこととする。

長岡と十分杯の問題点について私たちが感じている点を述べたい。主に、「①現存する資料や実物が少ないこと」と「②認知度が低いこと」が考えられる。

①については、長岡の歴史が深くかかわっていると考えられる。先述したように十分杯が長岡に入ったのは江戸時代前期である。しかし、江戸末期、長岡藩は北越戊辰戦争の戦禍を被った。明治から昭和初期には、前述した忠篤の命による十分杯や、蒼柴神社の県社昇格記念の十分杯などが作られた。しかしその後、日本は太平洋戦争に突入した。長岡は空襲によってまたも焼け野原となってしまう。このように、２度の戦災によって多くの十分杯や関係資料が失われたと考えられる。

②については、①で述べたように現存するものが少なく、多くの人々の目に触れる機会が少ないことが考えられる。

また、もう１つ考えられることがある。北越戊辰戦争と長岡空襲は共に長岡にとって大きなダメージとなった。それゆえ、その当時の指導者たちに批判的な意見が向けられることもある。河井継之助や山本五十六がその例であろう。十分杯会議の準備のためある企業を訪問したとき、長岡市の小学生あるいは中学生向けの社会化授業の副読本を目にしたことがある。そこには、郷土の偉人として、小林虎三郎が紹介されていたが河井についての記述は一切なかった。このように、河井ひいては江戸期の牧野家が教育に盛り込まれず敬遠されることによって、子供たちが小さい頃から十分杯に触れる機会が失われているのではないか。これにより多くの人々は十分杯を知らずに育つのである。よって認知度が低下すると考えられる。

以上の①、②のことが現状において最も問題であると考える。

それでは、以下のところで他地域の特色と長岡・十分杯の現状を比較していきたい。

５．２　事例紹介①　～「一乗谷遺跡」（歴史）～

５．２．１　一乗谷遺跡の特色

一乗谷朝倉氏遺跡は、福井県福井市にある戦国大名朝倉氏の城下町の遺跡である。当時、文化都市として栄えたこの地からは、多くの貴重な文化財が出土している。それらをまとめた資料館を設け、テーマごとに様々なイベントを開催している。

また、山間部に点在する遺跡や庭園、遊歩道などを活用した散策コースがあること。JRと地元のタクシー会社による「駅から観タクン」という観光コースがある点にも注目したい。

一方で、このような「遺跡＋出土品」というパターンのアピールは、全国で多く行われており、独創性に欠けるという見方もできるのではないか。

５．２．２　長岡と一乗谷の違い

現在、十分杯についての資料館は存在しない。長岡市郷土史料館にいくつかの資料と実物の展示がある。また、本学に広報のためにお借りしているものが展示してある他は、個人所有が中心であり、全体としていくつ現存しているかは把握できていない。また、散策コースあるいは観光コースという点では、確認できる範囲では、数年前に「十分杯でお酒が飲める店マップ」というものが作成されただけである。

このことから、十分杯には多くの人々に知ってもらうための広報手段が、存在していないという問題点が読み取れる。

５．３　事例紹介②　～「会津藩校 日新館」（精神）～

５．３．１　日新館の特色

日新館は、福島県会津若松市にある。かつてこの地を治めた、会津藩の藩校である。

ここでは、藩校時代の授業内容が再現されており体験が可能である。例えば、座禅や講話を通じて武士の礼儀作法、当時の教育に触れることができる。また、大河ドラマなどで話題となった「什（じゅう）のおきて」も学ぶことができる。さらに、弓道、薙刀といった武芸の稽古も体験でき、会津の武士の精神を今に伝えている。

このような、「精神を伝える」という名所や文化財は珍しく、注目すべきものであると考える。

５．３．２　長岡と日新館の違い

すでに述べたように、十分杯は「足るを知る」「満つれば欠く」という精神を体現している。しかし、これを伝えるということは難しいものである。これを伝えるには実際に体験してもらうのが最も分かりやすい。しかし、長岡市内の一部の居酒屋などを除いて、十分杯でお酒を楽しめる場所はない。紙コップ十分杯などで疑似的な体験はできるが、より印象に残るようにするためには本物の十分杯で体験してもらう必要があるだろう。

その点において、日新館では「教育」や「精神」といった無形のものを実際に体験してもらうことによって伝えることに成功している。

この比較から、十分杯はメッセージを持ったものであるが、それを伝える手段が整っていないということが分かった。

５．４問題点・課題と新たな提案

５．４．１　問題点・課題の整理

先述した、考察および事例研究から浮かび上がった問題点・課題を以下の４つに整理する。

① 「現存する資料が少ない」

これは、課題の根底にあると考えられる。資料が少なければ、実物に触れる機会が少なくなり認知度は低下する。また、一乗谷のように史料館を整備したり観光コースを整えたりするためには、ある程度の数が必要になる。先ほど、この原因は「二度の戦災による消失」及び、幕末の苦い経験から「河井継之助(≒長岡藩≒牧野家)から目を背けようとする雰囲気が一部に存在すること」であろうと推論した。

なお、「現存する資料が少ない」ということは、「現在確認されているものが少数」ということであり、「もともと、いくつぐらい製作され、存在していたのか」の確認には至っていない点に留意する必要がある。過去から目を背けようとする雰囲気の存在、それに起因する認知度の低さ、これらが重なることにより、暗闇に眠ったままの十分杯が多数存在しているのではないか。長岡市内での広報活動を行った際にも「十分杯を持っている」あるいは、「作ったことがある」という方が少なからずいた。このことから、本格的な調査を行えば、資料たり得る十分杯はもっと発見されるだろうと考えている。

② 「精神（メッセージ）を伝えることが難しい」

日新館のように当時の精神を体感してもらえるような施設は、長岡にはない。また、十分杯の精神が教育や生涯学習等に盛り込まれているとも言い難く、多くの人にとって「知らない」あるいは、「取っ付きにくい」存在になっているように思われる。

しかし、「足るを知る≒必要以上に求め過ぎない」という考え方は、現代において大切な精神であると考える。例として、大きくとらえた場合、今日の国家の経済発展において問題となるのは環境問題や資源問題である。それらを考えるとき、「自国の必要以上に資源を消費しない。汚染物質を排出しない。」という姿勢、すなわち自国にとっての「足るを知る」を実践することは、「持続可能な開発」の考え方に通じるものがある。また、ここまで大きくとらえずとも、日々の生活において「無駄な出費を抑える」ことや、「譲り合い」といった行動も、「足るを知る」に通じるものであると言えよう。このように考えると、私たちは日々の生活の中で「足るを知る」に似た考え方や姿勢を、特にそれとは意識せず行っているようである。よって、「足るを知る」と全く無関係という人は少ないのではないかと考察する。

③ 「興味を持たれにくい」

十分杯は、「酒杯」であるがゆえに若い世代や女性の方に興味を持たれにくいという現状がある。特に、子供に紹介する場合長岡とのつながりや、十分杯のメッセージをどの程度、また、どのように伝えるかが難しい所である。

考え方のポイントとしては２つある。１つ目は、「“カワイイ”十分杯」である。私たちが街頭で行った広報活動の際、若い女性の方が目を止めてくださることが何度かあった。その際ほとんどの方が、十分杯を見て「カワイイ」とコメントしていたこと

が印象に残っている。また、長岡観光コンベンション協会（以下、コンベンション協会）の方からも同じような印象を受けたとのご指摘をいただいた。これまでの「酒杯」や「歴史」、「精神」といった枠組みではなく、「雑貨」あるいは「インテリア」としてのとらえ方・アピールが必要だと思い知らされた。

2つ目のポイントは、「子供へのPR」である。先述した広報活動の際、小学生を相手に説明をすることも何度かあった。その際、最も興味を持たれたのがプラコップ十分杯での実演であった。十分杯をモデルとして単純化し、本体を透明にして、かつ色水を用いて可視化したことが、好評の原因だったようである。この時感じたのは、十分杯をモデルにした玩具があれば、子供へのPRにつながるのではないかということである。

④ その他の問題点

前述したように、歴史的史料として十分杯を紹介するだけでは、他地域との差別化が出来ず、味気無いものになってしまうであろう。他地域の事例に「学ぶ」のはよいが、「模倣」であってはいけない。どこかに、長岡・十分杯としての独創的な部分が必要である。

解決策を考える上では、以上の4点を考慮しなければならない。次項では、これを踏まえた私たちなりの解決策をいくつか提案したい。

５．４．２　新たな提案

提案①…十分杯 絵入れ体験

小学生のころ、当時広神村(現在、魚沼市)の工芸体験イベントで、無地の陶器製マグカップに自分の好きなように絵を入れるという経験をした。紙に描いた絵とは全く違う着色の感覚は、幼心にもとても楽しく感じられ今でも記憶に残っている。そこから考えたのが、この「十分杯 絵入れ体験」である。これは、主に小学生とその保護者を対象とする。十分杯の精神や歴史については触れずに、十分杯を知ってもらい興味を持ってもらうことを目的としている。すなわち、認知度を向上させるための策である。また、親子向けということであれば、酒杯ではなく十分杯を大型化したコップのような物(ピタゴラス杯のような物)を用いてもよいかもしれない。これまでの経験上、子供たちに十分杯を紹介する場合は、実物より紙コップ・プラスチック十分杯を用いたほうが好評であったことも考慮すべきである。

＜図36＞オリジナルのプラコップ十分杯

提案②…メッセージ・精神を活かした商品化

先述したように、十分杯の精神は「足るを知る≒必要以上に求め過ぎない」というものである。これを活かした商品として、2 つほど考えたものがある。

1.家計簿

かつて長岡藩 3 代藩主牧野忠辰は、藩士たちに倹約を奨励し、財政の引き締めを図った。その際、戒めの象徴として十分杯を用いたとされる。これの現代版として、十分杯をデザインした家計簿を提案したい。それに十分杯についての簡単な説明を添えることで、「十分杯＝足るを知る」というイメージの定着にも、ある程度寄与するのではないだろうか。

2.扇子・うちわ…「多少の暑さはこれで十分」

最近では、エネルギー問題、地球温暖化などの影響を受け、夏季を中心に節電を訴える声が大きくなっている。そのためには、クーラーを使わない、あるいは設定温度を上げるという方法が広く知られている。この時、代わりに利用される扇子やうちわに十分杯をデザインすることを提案する。すぐにクーラーを使うのではなく、多少の暑さは扇子やうちわでしのげば「十分である」というメッセージを表し、さらに、十分杯の精神を身近なところで体験することができるのではないだろうか。

また、以上の 2 つの他にも十分杯そのものについて、新しいものを開発していくことも必要だと考える。先述のように、女性の目線では十分杯は「カワイイ」ものであると認識されているようである。だとすれば、見た目の可愛さを重視した十分杯があってもよいのではないだろうか。意見としては、かつて販売されていた「招き猫十分杯」のようなものを、新しく作って販売することを提案したい。以前、コンベンション協会の方が「十分杯を買ってくれる人のほとんどが高齢の男性である。」と話していた。また、十分杯を「カワイイ」と評価してくださった女性の中には、「部屋に飾りたい」という方もいた。部屋の装飾品としても使える、カワイイ十分杯を販売することで、これまで十分杯とはかかわりが少なかった女性にも興味を持っていただき、新たな市場を開拓することができるのではないかと考える。

＜図 37＞招き猫十分杯

提案③…十分杯 美人・美男絵巻

美人時計、美男時計という Web コンテンツがある。運営企業によって選抜された美女、美男が時刻の書かれたボードを持ち、現在時刻を知らせてくれる時計である。モデルの持つボードの時刻は 1 分ごとに違うものになっており、コンテンツの画面にも 1 分ごとに違う写真が表示される仕組みになっている。また、最近では他のコンテンツとも連携しており、モデルが持つボードの時刻部分に店名などを併記したテレビ CM や Web 広告を目にすることも多い。これに着想を得て、「十分杯美人・美男絵巻」を考案した。具体的には、まず、モデルに酒蔵や居酒屋で十分杯でお酒を飲んでもらい、それを写真に撮る。そして、これを写真集兼パンフレットとして販売、もしくは配布する。または、「十分杯」にちなんで、毎時 10 分の時刻表示と共にモデルの方と十分杯の写真を掲載するというのも、遊び心があってよいかもしれない。いずれにしても、十分杯と美人・美男を結びつけることで、若年層に対し「お酒＝カワイイ」あるいは「カッコイイ」というイメージを持ってもらう効果が期待できる。さらに、一歩踏み込んで「十分杯」を取り入れることで、十分杯を知らずに育ってきた世代の方々に、その存在をアピールできる。十分杯の現状において、中～高年齢層以外に興味を持たれにくいという問題があったが、「十分杯美人・美男絵巻」は、この問題を解決するための起爆剤になるのではと考えている。

６．結びに代えて

2 年生 3 人で一丸となり一所懸命走ってきた 1 年間だった。始めたころと比べると、特に、コミュニケーション力が付いたと言われた。普段話すことのない立場の方にたくさん会えて、役に立つ話をたくさん聞かせてもらった。また、十分杯会議のためにはたくさん準備した。大変だった。その結果、プレゼンテーション能力は多少上がったのではないかと感じている。実際、12 月の地域活性化の成果発表会が終わってから、多くの方からかなりお褒めの言葉をいただいた。失敗もあった。もっとも貴重な十分杯を割ってしまった。自信があった資格試験にも落ちてしまった。時には、説明がうまくいかなかったり、間違えて説明したりした。そのたびに。私たちを応援してくださった方々に深く御礼申し上げたい。

そして、私たち 3 人のこの 1 年間の活動がこれからの長岡の発展において小さな一歩になれたらいいと思う。

最後に、「満つれば欠く」という言葉を肝に銘じながら、生きていきたい。

参考文献及びウェブサイト

朝尾直弘、石井進、鹿野政直、網野善彦、早川庄八、安丸良夫（１９９４）『日本通史第１３巻』　近世３　岩波書店

朝尾直弘、赤井達郎　木村礎、桑波田興、葉山禎作、秀村選三、藤井譲治、藤井学、安岡重明、渡辺信夫（１９９４）『日本歴史１０』近世２　岩波書店

磯貝文嶺、吉澤俊夫（１９９８）『長岡・柏崎の歴史』　郷土出版社

稲川明雄（２００４）『長岡藩』現代書館

内山　弘（２０１１）『十分杯（改訂版)』長岡歯車資料館

蒲原拓三、坂本辰之助（１９８０）『長岡藩史話』歴史図書社

坂本辰之助（１９８０）『牧野家家史』牧野忠篤

進士外編（１９８０）「江戸（中)」『図説日本文化の歴史』小学館

長岡市（１９９３）『長岡市史　資料編２　古代・中世・近世一』長岡市

長岡市（２００４）『長岡歴史辞典』

長岡市（１９９８）『ふるさと長岡の人びと』長岡市

長岡市史編集委員会近世史部会（１９９２）『長岡藩政資料集（４）長岡平蔵収集長岡藩資料』長岡市

長岡女子師範学校付属小学校、長岡市小学校教育研究会（１９８５）『長岡郷土読本　下巻』目黒書店

本山幸一（２００６）『越後長岡の江戸時代』高志書院

森三樹三郎（１９７８）『老子・荘子　人類の知的遺産５』講談社

山口充一（１９７７）『郷土ながおか』北越書館

横田冬彦（２００２）『天下泰平』講談社

「石垣島観光ナビ」http://www.ishigaki-navi.net/p_chawan.html

「漢字Ｑ＆Ａコーナー」http://www.taishukan.co.jp/kanji/qa11.html

「十分杯」 juubunnhai.blogspot.com/

「足るを知る」http://www60.tok2.com/home/gojinka/taru.htm

「デジモバ」http://www.digimoba.com/products/chawan/chawan.html

「長岡大学」http://www.nagaokauniv.ac.jp/

「美人時計」http://www.bijint.com/

「松田卓也」『サイフォンを巡る誤概念 http://citanul.web.fc2.com/TEMP2/siphon1.pdf

---

1　森（1978）p.138

2　森（1978）p.31

3　少欲（欲をわずかにす)、知足（足るを知る)、楽寂静（寂静を楽［ねが］う)、勤精進（精進を勤める)、不忘念（念を忘れず)、修禅定（禅定を修める)、修智慧（智慧を修める)、不戯論（戯論せず）の八つ。なお、八大人覚の概念自体は、別の経典（『長阿含経』『阿那律八念経』等多数）にも見ることが出来るが、その内容は、それぞれ相違する場合がある。

4 越後騒動・・・高田藩にて起った御家騒動。藩の政治を執っていた「小栗美作（おぐりみまさか）」と、これに敵対する重臣とが争い、徳川五代目将軍綱吉の裁定で両派に厳しい処分が下され、高田藩は幕府に没収された。没収に際し、高田城の受け取りの役を命じられたのが牧野忠辰であった。

5 水害・・・信濃川は暴れ川と言われており、治水技術の発達していない当時は多くの水害があった。寛文十年（１６７０年）から嘉永四年（１８５１年）までの約１８０年間で５２回の水害が記録されている。これは単純計算で、３年半に１回の水害が起きている事になる。

6 三河・・・三河国（みかわのくに）は、現在の愛知県東部にあたる。牧野家は三河出身である。

平成26年度　学生による地域活性化プログラム
権五景ゼミナール活動報告書

【発行日】　平成27年3月26日
【発行人】　内藤　敏樹
【発　行】　長岡大学　地域活性化プログラム推進室
〒940－0828　新潟県長岡市御山町80-8
ＴＥＬ　0258-39-1600（代）
ＦＡＸ　0258-39-9566
http://www.nagaokauniv.ac.jp/